

第 48 回 * 2006 年 8 月 6 日

パネラー：なだいなだ

金子務

リプライ講演：いいだもも

古代ローマ世界帝国の興隆と没落

ーギボン以来の古代ローマ興亡の西洋世界史的意味

今日のパクス・アメリカーナの前途は？

はじめに

猪野修治 本日は 8 月 6 日です。わたしたちにとっては歴史的な重大な日であります。1945 年生まれのわたしは、この数十年、広島市長の平和宣言の内実を思想的機軸として生きてまいりました。人類に対する無差別殺戮という重大な国家犯罪を許すことなく、絶対悪の核兵器を完全廃棄する全世界の無数の諸運動団体と連動・連帯して行かねばなりません。しかし、現実の国際的な政治状況はまったく好転しておりません。ここではその具体的現実を述べる場面ではありませんが、今日の秋葉広島市長の平和宣言を聞く限り、一步後退の感をもたざるを得ません。

さて、本日のパネラーは、作家のなだいなださんと科学史家の金子務さんに御願いました。これまで同様、先ずパネラーの方々にお話を頂き、それに対するリプライ講演をいいださんをお願いすることにします。

まず、なだいなださんを御紹介します。有名な作家で精神科のお医者さんです。またヴァーチャル老人党の党首でもあられます。これは余談ですが、この連続講演の案内を各方面に差し上げましたら、「なださん」と「いいださん」をまちがえておられる方がおられます。金子務さんは有名な科学史研究者で、アインシュタインの研究者として知られ、また放送大学でも教鞭をとられております。本日は、このお二人に、あまり本日のテーマにこだわらずに忌憚のないご意見をいただきながら、議論を深めていきたいと思っております。

なだいなだ いいだももさんと間違えられたのはかなり昔からなんです。わたしが「カペー氏はレジスタンスをした」という題のアルコール中毒の患者さんの話を書いた。それに対する批評が「群像」という雑誌に出た。中野重治ら三人の鼎談の形の書評です。表紙をあけてみたら「いいだもも」作、と書いてあるんです。レジスタンスの話をおもひに神話化しすぎることに、ちょっと水をさすような小説だったもんですから、いいださんに迷惑がかかるのではないかと思いました。ぼくには「だ」が二つ、「い」が一つ。ももさんの方は「だ」が一つで「い」が二つ。でも、全体とすれば間違いようがない。両方ともひらがなの名前で重複するところがあるんですね。世の中にはおっちょこちょいな人がいて、しかもそれも冊子の編集者なので驚きました。ひらがなの名前は共通していますが、いいださんは、ぼくとは似ても似つかない大変な人です。ご一緒に早稲田で講演したことがありますが、いいださんが講演をされたあと、似たような話をしても目立たない。もうやぶれかぶれで馬鹿でいこうと決心したんです。

そのときに話をしたのは、アルコール中毒・アルコール依存の研究をやってきたのだけれども、どういうわけか日本では「イズム」という言葉の訳に三種類もある。マルキズムのときは主義、アルコーリズムのときには中毒、そしてクリティニズムのときにはキリスト教です。なんでみんな中毒と訳さないのか（笑）。マルクス中毒、キリスト中毒など、いいではないかと。これが学生には受けたので、ぼくは人生、こういう馬鹿を言い続けてきたのです。いま重要なことは馬鹿を言う人がいなくて、利口な人ばかり多くなったことです。利口な人は利口な人を尊敬し神格化する。例えばフロイトというとフロイトを神格化する人が多くて、フロイトを尊敬するあまり、フロイト先生がこういったというと、議論が進まない。いかに尊敬したところで、フロイトは過去の人。フロイトが見ることが出来なかったことを、わたしたちは見ているということです。例えば、歴史研究に、古い時代に書かれたギボンの『ローマ帝国衰亡史』があります。なぜ、この時代にギボンが書いたかということ、18世紀というのは面白い時代だったんです。いってみれば理性依存みたいなどころがあるんです。理性的にもものを見ようとしていた。18世紀のヴォルテールもモンテスキューも、みんなそうなんです。かれがフランスで出会ったダランベールだとかディドロだとか、そういう連中はみな神秘化しないものを見ようとするところがあったわけです。いまでも、わたしは18世紀に興味をもっていますが、科学的な歴史研究みたいなものも始まり、ローマをどう見るかということも始まった。わたしは精神科の医者で、そっちの勉強をくわしくやるわけにはいかないの、百科事典的知識で間に合わせているのです。この百科という考え方も18世紀から始まった。

さて、精神科的な話になりますが、一番古い病名がヒステリーです。ギリシア時代にヒステリーという病気の名前がつくられた。子宮という意味からつくられた言葉です。女性だけに起きるから子宮に関係すると思われてきました。子宮が体の中を動き回って、さまざまな症状をおこすのだというふうにギリシア時代の科学者は説明したのだけれど、今からみると子宮が体の中を動くなると、馬鹿くさいこと言っていたとお思いになるだろうけれども、しかし、その当時、同じような病気を他の民族はどうみていたかです。悪魔がついたというような見方が中近東では多かったのです。ですから、福音書の中に、ガラダの豚の話がありますが、その悪魔は豚につくまえに人間についているのです。病気になった人間が、イエスのところにやってくると、悪魔に人間の肉体から外に出ていけと命令するわけ。すると、豚に移り、豚は群れをなして海の中に飛び込んでいったという話がある。そういうふうに悪魔がついたという考え方が支配的であった。

日本では悪事をした報いで病気になるというような説明がありましたが、身体に原因があると考えたのはギリシア人が始めなのですね。子宮に原因があるという考えが間違いであっても、後になると選別が行われ、子宮は解剖的にみて動くものではないから、子宮が原因であるはずがないというような意見が出てくる。そしてそれで子宮が原因でなければどこであろうということになり、おそらく脳に原因があるであろうことは、すでに中世の終わり頃には考えられていたわけです。ルネッサンスの始まりのころですけれども、ダ・ヴィンチたちは死体を解剖したわけですね。人間の筋肉はどうなっているかという筋肉の図譜を書くために、ダ・ヴィンチは墓場に行って埋められたばかりの死体を掘り返して解剖している。かれら画家たちはローマ法王の庇護を受けていた人たちが多かった。ローマ法王の仕事を請け負っていて、かれらのお墓を建設したりしていたので、まあ、タブーであった死体の解剖をやっていいと認められなかったのです。医学の研究をしている人、人間の病気を研究していた人たちは、どうであったかということ、なかなか死体を解剖することなどできなかった。でも、ダ・ヴィンチたちが夜な夜なやっているように、自分たちもやろうとして死体の解剖を100体ばかりそろえた人がいたのです。最近、筑

摩書房から出した本『こころの庭に見えたもの』の中に書いてありますから参照してください。これがパトロジー（病理学）という学問のはじまりです。病気の原因を人間の身体の中に求めるようになった。そして肝臓にブツブツがあるから、生きていたときにあった。これこれの症状は肝臓のせいであろうとか説明するようになった。それがまとめられ本として出たのは、日本で解体新書がでる 10 年くらいまえなんです。そういう研究は西洋医学だと言っているけれども、西洋では 18 世紀までなかったのです。実証精神に充ちた人々が解剖して調べてみようということになり、実際に調べていったのです。その時代からはじめて人間の病気が、はっきりイメージされるものになってきた。体のどこが悪いからどういう病気だということがわかってきた。18 世紀の終わりから顕微鏡がうまく使われるようになってきて、19 世紀のはじめころには、肝臓の細胞がどういうふうに変化していたらこういう病気が出るとか、すい臓のどこの細胞が変性していたらこういう病気になるとか。例えばすい臓の中のランゲルハンス氏島は、悪くなると糖尿病になる。こういう実証的精神というのが、すべての学問に影響を与えてきた。そのことを知りながら振り返ってみると、先人の中に、意義のあるあやまちをしてくれた人が見つかる。ヒポクラテスなんか、ヒステリーを間違えたけれども、しかし近代と同じパラダイムの中での間違いであったということです。例えば、今回のいいださんのユリシーズの本の題名をくれたギリシアの詩人ホーマーですが、人間が馬鹿で起こした戦争もみんな天上の神様のせいにしてしまい人間が責任を取らないのは困ったことだというふうなつぶやきをもらしています。ヨーロッパばかりではなくて中国の古い思想家たちも非常に明晰で、18 世紀の啓蒙哲学者の言い出したことを、二千年も前に言っている。ローマ時代のセネカなんかも、人間は老いて死ぬように国だって必ず老いて死ぬ、それが運命だ、などということを行っているわけです。非常に透徹した目を持っていた人が二千年も前にいた。そういう人たち、18 世紀の人たち、そして現代のわたしたちとくらべて、ほとんど変わらない。では、なにも進化していないではないかと思うけれど、やはり大きな進歩がある。というのは 2000 年前にはたった一人のセネカが、18 世紀の終わりにはたくさんのセネカがいた。

こうして自分の責任で行動することが出来るようになった。そのことをしみじみとを感じるんです。わたしはおばあさんのことを思い出します。無学文盲で文字が読めず書けなかった。情報はなにかというと、全部、耳から入ってきた。しかし、耳から聞いて覚えた情報というのは、非常に保持力があつた。だから民族学者たちがそれを書き留めると非常に古い時代のものが出てくるのです。私はその保存力をしみじみと感じたことがあります。驚くときに「おきよ」とおどろくのです。変なおどろきと思ったが、柳田國男の文章を読んでいるうちに、「おこの文学」というのがあって、かれはそこで推定している。

万葉時代の人々はどうして驚いているんだろう。「おこ」という言葉が驚きの言葉であつたと。かれの勘は鋭かった。わたしのおばあさんの、「おきよ」は、「おこ」だったのでね。わたしたちの明治以降の日本語では、夕方（ゆうがた）と覚えさせられたけれど、おばあさんたちは「ゆうさり」でした。「ゆうさり」のほうが、万葉の言葉で優雅でうつくしい言葉です。そういう言葉を使う人間のこころと、こころの病気とどんなつながりがあるかを私は考えてきたんです。いいだもさんの書かれている世界は、ひかり輝いた世界です。理性という精神を私も科学者として持っているんですが、しかし、病気の世界は陰の部分です。そのままの形で出てきていたのが、私たちのおばあさんたちの病気です。「狐つき」というのは 2000 年前ずっと続いていていたのですが、その狐つきが日本で消えたのが 20 世紀の真ん中頃です。1950 年頃です。なんで消えたかということ、理性の光によって消えたのです。狸がひとを化かすとか、狐がひとを化かすとか、そういうのは迷信だということをほとんどの人間が知り尽くすようになってから、こういう病気は自然に消えて、次にヒステリーという病気が出てきた。病気の交代

が起こる。そしてそのヒステリーが消えてしまいます。20世紀の後半でヒステリーという病気が消えてしまい、不安神経症という不安を主体とする病気に移っていく。それは、人間の暗黒面です。いままでの大衆運動の挫折の一番重要なことは、マルクス主義がマルクス依存になってしまったり、マルクス中毒になってしまったところにある。大衆はどうしてもそういう傾向がある。それに気付かなかったために個人崇拜になってしまった。そしてわたしたちに、労働運動で一番大切なことは主体をけって失わないということであることを忘れさせたのは、大衆の中にあるそういう古いものを忘れていたからだと思うのです。

話はこの辺で終わりますが、歳をとるとだんだんまとめられなくなる。無理にまとめようとする、どこまでも時間が延びていってしまう。そのために、わたしは一番よい方法を、浪曲の広澤虎造から学んでいるんです。「ちょうど時間となりました」と（笑）。これはいい知恵だと思います。そして最近、どうもまとめられなくなったときには、この虎造をつかうのです。ちょうど時間となりました。次に交代ということにします。

猪野 ありがとうございます。では次に、金子務さんに御願います。

金子務 お手元に資料をお配りしてあります。このテーマに直接に関係する資料ではないが、でも、ギリシアには関係があります。まあ、なにかの参考になるのではないかと思います、お配りしました。私の友人から頼まれて公明新聞の文化欄に毎週日曜日にコラム（「科学史の街角」）を書いているものです。最後のものは、アポロン信仰と関係するものです。

今日来た人にこれだけはぜひ頭に刻んでお帰りになってほしいなあと思います。つまり、ギリシア文明について、ある誤解がこびりついているんです。日本人、特に東洋では、地中海文明についての基本的な誤解がある。それは、月桂冠の問題であります。オリンピック競技でも何でも優勝者は月桂冠をかぶると考えているひとが多いのですが、オリンピックは月桂冠ではなくてオリーブ冠なんです。もちろん月桂冠をかぶるときもあるのです。月桂冠はアポロンの木、月桂樹の木で、アポロンは詩神でもありますから、実際に現地のオリンピアに行かれた人はわかると思いますが、オリーブ冠をつくって観光客をつかまえて写真をとらせる。つまりそこではアポロンの父であるゼウスの聖樹であるオリーブに意味がある。地中海文明の基本になっている樹種は、オリーブと月桂樹なんです。これが基本的な木です。両方ともいたるところに見られる。月桂冠とオリーブ、これは区別しなくてはいけない。月桂樹というのは明治の日露戦争のときに戦勝記念でフランスから贈られ日本に入ってきた。明治38年頃です。これは『牧野植物図鑑』に出ています。牧野さんのそのときの説明を読んでいると、オリンピック競技のあとにも月桂冠を使うと書いてある。牧野さんあたりでも間違えるのですから、当時の多くの日本人も間違えるのかもしれない。長野オリンピックのときにつくられた有名な彫刻家の彫像に女神が出てくる。これは月桂樹の小枝をもっている彫像なんです。ほんとうは月桂樹であってはまずいんです。オリーブの枝でなければならない。しかし、詩人たちが詩作の競技をしてもらう月桂冠は正しい。それからノーベル賞受賞者はノーベル・ローリエイトというでしょう。ローリエイトというのは月桂冠を冠る人という意味ですけども、そういう学問とか詩人とか、あるいは将軍とか、そういう人たちの名誉をたたえるために、月桂冠をかぶせるのですが、けれども、神学的・神話的伝統の世界とのつながりを考えると、

オリンピックでは月桂冠はまずいのです。だから、オリンピック委員会はその辺は誤解していないのです。ただ、日本人があれを見て、あれは月桂冠だと思っているだけ、実際はオリーブ冠です。

この間のトリノでも授賞式の時にもよく見るとやはりオリーブ冠です。そういった誤解を解いていただくための資料です。つまり僕が言いたいのは、われわれは、日本みたいな照葉樹林帯文化といわれる地帯にいます。地中海文明というのは植生学的に言うと硬葉樹林帯文化で、硬葉樹林帯の植物の代表的植物がオリーブと月桂樹です。ですから、日本人や中国人はそれについて区別はほとんど出来なかった。

例えば近代明治になって聖書が翻訳されてきますが、聖書の中にオリーブというのがたくさん出てきます。それを「かんらん」（橄欖）と訳したのですが、これも間違いです。「かんらん」（橄欖）は別の植物の名前です。中国の南部にあると誤解した。例えばオリーブを「かんらん」と訳したりしています。旧約聖書の訳を見ると、だいたい「かんらん」と書いてある。要するに、自分たちがよく知らないほかの文明を理解することはいかに難しいことか、という典型的なひとつのケースだと考えていただいて、ほんとうに勉強するというのはかなり大変なことだと思います。これは私自身にとっても自己反省の材料でもあるのです。

実は本日、なだ・いなださんと40年ぶりくらいで再会しました。私は1960年代後半にかけて新聞社の週刊誌の記者をやっていて、あのころは学生運動の全盛期で佐世保闘争とか成田闘争とかがありましたが、ちょうどその直前にビートルズが日本にやってきて、僕がいた新聞社が招聘したもんだから、ビートルズを取材して彼らの音楽を私は一番最初に日本武道館で聴いています。頭が痛いだけだったですけれどね（笑）。だいぶたって新聞社をやめてからあれはいいもんだったなあ、と思いました。それ以降の大学紛争期は60年代後半ですが、東奔西走していて、そのさなかで、なだ先生とお会いしました。実は、佐世保闘争のときエンタープライズに乗り込んでルポを書いていたのですが、同時に、御用係として、なだ先生にも現地ルポを御願ひしていたんですよ。要するに、なだ先生と話が出来そうなのはお前ぐらいしかいないだろうから、先生の面倒を見てくれというわけです。それ以降、私は鎌倉に住んでいて、なだ先生のご活躍は紙上では拝見していましたが、懐かしい思いです。今日、こういう機会を与えていただき再会できてうれしい思いです。なだ先生から取材の合間に教えていただいたレヴィー・ストロースの話をかきかされて印象深かった思い出があります。

それから、いいだもさんの本は、毎回、分厚い本をお書きになっているのですが、今回も分厚い本が何冊もあって、初めはしり込みし、コメントする立場にないから無理だとお断りしようと思ったのですが、猪野修治さんから熱心に要請され、一番最後にまわってもいいからといわれ、引き受けました。それでも正直いいまして、2巻まで読み、あとはひろい読みしているだけです。ですから、とても義務を果たさないで、ここへ出てこざるを得なかったものですから、内心、忸怩たる思いがあります。ほんとうにあれは枕頭の本で時には枕にさせていただいたりしました。これは冗談です。僕も70を過ぎましたけれども、いいだ先生は僕より10歳上です。これだけのヴァイタリティをお持ちになっていて、それで内容は濃く文献も豊富で深く教えられることがいっぱいあります。私ごときがいいださんの本を論評する立場にはないのです。

さきほど煙に巻くようなお話をされましたが、私も煙に巻いて逃げるしかないなあと思っております。ただ読んでいてですね、いいださんはたぶん、書物の世界を発掘されていていますが、先ほど申しましたように、私は新聞記者、雑誌記者、編集者、そして学者、そういった経歴でして、考えてみたらみな「者」がつくんです。「者」というのは、柳田國男の有名な話があるのですが、「者」がつく商売とい

うのは漂泊者なんです。医者にしても芸者にしても、学者同様、本来、はぐれもの「マージナル」な存在で、要するに、支配者と被支配者の間で、その隙間をうろうろしている。そういうものがみな「者」なんです。だから学者というのは、大学なんか勤めて給料をもらうなんていうのは本当はおかしいんです。いいださんみたいな立場でやっている人がほんとうの学者なんです。給料をもらっている学者なんていうのはほんとうはダメなのです。わたしは今は無職になりましたが、ようやく「者」が抜けた感じですか。そういうわけで、いいださんのご本からは得るところが大であって、とても私のほうでコメントする立場ではない。

先ほど、なださんのヒステリーのお話を聞きながら、ああ、そうだなあと思っていたのですが、私は科学史の分野におりますが、当然、医学史も関心の対象になっております。ヒステリーは不安神経症と呼ばれるとおっしゃっていましたが、第一次世界大戦時までヒステリーというのは女の病気だ、男はヒステリーなんかにならないぞ、という、偏見にみちた世界だったわけです。ぼくらは女性差別というか、今日、わたしが見直したいと思っているのは女性原理の問題、女性差別に関係する問題について後でふれさせてもらいます。

実は男もヒステリーになるというのが明らかになるのは第一次世界大戦のときです。これはシェル・ショックといって、砲弾が飛び交うとき、異常をきたすんです。戦場からもどってもその状況はおさまらない。震えが止まらない。子宮をもたない男もヒステリーになるんだということが明確になったのです。精神医学のレベルでも大変に画期的な発見だったのです。フロイトの神経症対策の問題などがでてくるのは、それからです。精神分析学の手法が開発され精神病を薬で治すとか、いろんな動きがでてくるのは第一次世界大戦以降なのです。ですからこれはあたらしい問題で、つい最近まで、暗黙のうちに男性支配の下で、女性にたいする偏見を臆面もなくやっていた時代が続いてきたのです。ヒステリーなんかはその例のほんのひとつに過ぎないと思います。

いいだ先生と私なんか、どこがちがうかなあと思うと、私は基本的に現場主義なんです。歴史家ですから、もちろんいろいろな文献やいろんなものも読みます。ただ、なんと言っても現場に行くと現場に立って考えないと気がすまない。お前は新聞記者だからそうなんだろうといわれるが、ばかいうな、新聞記者だっていろんなやつがいて、記事を書かない人間はいくらでもいると言っているのです。ただそういうことが私の性分であることもあるが、やはり、なるべく予断を持たずにある程度の知識を積んだあとは、自分の目と自分の肌でその場の空気を感じ取りながら考えて行きたい。そういうふうになっています。

実はギリシアの文明の問題というのはある意味では科学技術の一番の原点の問題ですから、われわれは避けては通れない。だけど、多くはギリシアというとギリシア本土のことになる。ここに地図を持ってきましたが、これがギリシアの地図です【編集部注：地図を示しながら説明】。一説によるとギリシアは5つの海に囲まれている、といます。ほんとうに5つの海があるのか、と聞いたことがある。エーゲ海、イオニア海は有名だからだれでもわかるが、トラキヤ海、ミルトア海、クレタ海、これで確かに5つになるんです。地中海のクレタ島などの島々もギリシアですから。こちらが現在のトルコです。このギリシア本土とわずかにコリント海峡でつながっている南の部分が、ペルポネソス半島です。スパルタなんかこのなかにある。アテネは本土南部の辺にある。だからギリシア全体の地理からいうとかなり南によったところに、アテネとスパルタがある。アレキサンダー大王がでてくるのはずっと北の方です。ペラスというアレキサンダー大王が生まれた町がある。その西方にスタゲイラというところがあ

る。アリストテレスはこの町に生まれている。もっと東のアブデラからは原子論のデモクリトスが生まれていて、そこからもっと東へ行けば、すぐトルコ領のイスタンブールで、昔のコンスタンチノポリスです。だから、ギリシアの主要な偉人の多くは、いわば僻地から出てきているということです。

アレキサンダー大王が出てくるのはマケドニア地方です。現在のギリシアへ行ってわかったことは、ギリシアというのは岩だらけで木は何も生えない国というイメージが強いが、海はとてもきれいです。そのイメージは南のほうにはあっているんです。しかし、北の方へ行くと森林だってあるし、緑がゆたかで必ずしもそのイメージではない。だから、統計的にみても、鳥とか爬虫類の種類からいっても、ギリシアなんかより遥に面積が大きいヨーロッパ大陸のフランスやイタリアといった大国と比べても、ギリシアの方が種類が多いのです。植物も動物も豊かなのです。ですから、岩山のイメージでギリシアを見ると、どうも、間違いではないかと、ひとつは思います。それから、戦後 30 年くらいギリシアに住んでいる日本人に聞いてみると、この方はアテネに住んでいるのですが、ギリシアでは断水なんか一回もない、という。降雨量は多くないが地下水は豊富だと言っていた。地下水が豊富だから水は贅沢にとれる。だから水の制限を受けたことは 30 年間に 1 回くらいしかなかったという。ですから、そういうところでもわれわれのイメージと違う。冒頭、オリーブ冠と月桂冠のちがいの話をしましたけれども、よその国、自分のよく知らない国を知ることはずいぶんむずかしいものだ、と感じました。

それでギリシア本土をよく見たいのだけれども、その前に、周辺を見てみたいとかねがね思っていた。念願がかないまして、エーゲ海クルーズをしたり、小アジアを回ったりしました。こちらはトルコなんです。エーゲ海に面したこの辺はトロイの遺跡があるトロイアですね。その近くにダーダネルス海峡があります。ここは第一次大戦のときの激戦地です。トロイ戦争のときの激戦地でもあった。こちらに黒海がありますが、黒海の物産をダーダネルス海峡を渡って持ってきて、アテネとかに運ぶんです。その海峡を抑えていたトロイが全部貿易をコントロールしていたんです。軍事力でもって出入り口を支配していた。トロイがお金を巻き上げてけしからんというのが、トロイ戦争です。極端な話をすると、トロイ戦争というのは、ギリシア以来の第 0 次世界大戦だったという気がします。というのはトロイ側についたのはみなアジア側、トルコ側にあるポリスの連中がみなトロイを応援しているんです。実態は経済戦争なんです。それで、ギリシア語いがいの言葉が、トロイ側の陣営で飛び交っていたということが残っているんです。ですから対アジアとヨーロッパとはいわないまでも、こちら側との激しい戦争であった。だからトロイ戦争は 10 年もつづいたのです。一ポリス同士との戦争で 10 年も続く戦争などは考えられない。それだけ大規模な組織的対立があった。トロイに行って感じたことです。それから、いまのトルコ側に、いわゆるイオニア文化圏というギリシア文明発祥地の母胎があります。

ここに、ボドルムというすばらしい保養地があるが、その北のミレトスとエフェソスとかサモス島とかまで含めてエーゲ海側にある地域が、イオニア地方と呼ばれるところに、ギリシア人植民のポリスが集結していました。これはギリシア本土のポリスと同じといってよい。ギリシア人たちが北のほうのマケドニア地方から異邦人の南下・移動してくる勢力におされて自分たちの植民地を作る。これが実態だと思うが、そこにはまた先住民族がいたわけです。

エフェソスというところが一番、わたしが話をしたい場所なんです。その前に、ギリシア文明はいいだ先生の本のなかにもくわしく書かれています。例えばクレタ文明、クノッソス文明。クノッソス宮殿、いわゆる迷宮という語源になったところですが、それが 1900 年に発見され、それ以降、ギリシア古典文明のもっと先に古いミノア文明があったのだと。さらにミノア文明と関係しているペロポネソス半島

のミケーネに、クレタ文明の後期相当の文物が発掘されている。それで、トロイ戦争に出かけるギリシアのアガメンノンがいたのはミケーネです。例のシュリーマンがトロイの遺跡を発見します。トロイの発掘をやってからミケーネの発掘にかかり、アガメンノンの黄金のマスクなるものを発見した。本当にアガメンノンの黄金のマスクだったかどうか、知りませんが、しかし、アガメンノンがあそこから出発してトロイに向かったことはまちがいない。こういう古代文明が 20 世紀に入ってから続々と発見されてきたのです。それで、ギリシア文明を理解しようとすると、ものすごく複雑怪奇で非常に多層構造をしている。私たちがむかし、ギリシア哲学を習ったときに、まずソクラテス以前の哲学があって、ソクラテス以降の哲学は自然哲学から人間の原理とか人間の生き方に関わっていく、そういう一種の講座主義的な説明を受けてきたのです。そのときには自然環境は関係ないわけです。しかし、自然哲学を唱えたタレス、アナクサメネスを育てたイオニア文化圏というのは、実は小アジアにあるのです。ギリシア本土ではないのです。こちらへくれば、根っことしては、今のイラク、イラン、インドなどのアジアにつながるわけですし、いわゆる当時のイオニア地方というのはいわゆるヒッタイト帝国やフェリギア王国の支配下に一時期はあったわけです。

ヒッタイトというのは、BC 13 世紀に出現し、人類史上はじめて鉄を使い出した民族です。いわゆる鉄文明ですね。それがアナトリア地方、現在のトルコのある半島ですが、小アジアに展開し現在の中近東と全部くっついている。アナトリアだけに着目してみてもヒッタイト帝国は理解できない。やがてこのヒッタイト帝国も BC 7 世紀にはフリュギア王国にのっとられます。フリュギア王国の時代にイオニア文化圏はその支配を受けている。フリュギア王国には有名なミダス王、「王様の耳はロバの耳」の王がいた。この父とも祖先ともいわれる初代の伝説的王がゴルディオスで、いわゆる「ゴルディオスの結び目」を神殿の牛車に残した。これを一刀両断して、アジアの王になったのが、マケドニアのアレクサンドロス大王でしたね。

私が言いたいのは、エフェソスですけれども、エフェソスというのは、エーゲ海をぐるっとまわったアナトリア半島の沿岸地帯のイオニア文化圏で、ここに、クシャダスという港がありますが、そこから内陸に少し入ったところにある。やはりイオニア文化圏のミレトスとならぶ中心都市です。例の新約聖書に出てくる聖パウロは、現在でいうトルコの地中海に面したタルソスの出身ですが、アナトリア半島、つまり小アジアにおいてユダヤ人以外の民族にキリスト教を布教することによって、はじめてキリスト教が世界宗教になるわけで、だから、アナトリア半島におけるパウロの布教は重大な意味があったのです。しかし、大部分は成功するがエフェソスでは失敗するのです。パウロはエフェソスに 3 年もいて布教していたのですが、その人々は言うことをきかなかった。というのは、ここにアルテミスという女神が古代からいて、その信仰が根強かったからです。その話が私の主題なんです。これで時間がきてしまいましたね（笑）。

あと 5 分くらいいいですか。

エフェソスのアルテミス神殿は、古代世界における七不思議のひとつなんです。ご存知でしょう。ピラミットとか、バビロンの空中庭園とかありますが、おそらく、七不思議のなかのもっとも重要な神殿がアルテミス神殿だろうと思います。それがこのエフェソスにあって、この土着信仰が強いものだから、パウロも失敗する。

ヘラクレイトスという有名な自然哲学者がおりますが、エフェソスの人です。ヘラクレイトスは要するに万物は「火」であると唱えました。「水」だと唱えたのはタレス。「空気」と唱えたのはアナクシメ

ネス。万物を種にたとえたのはアナクサゴラス。バーに行って酒を飲んでいると、「水をくれ」というでしょう。あるいは煙るから「窓をあけてくれ、空気をいれろ」とか、「ちょっと寒くなったから石油ストーブの火をつけて」とか、「おつまみに柿の種ないかなあ」とか。要するに、ギリシア自然哲学の原点のすべてがここにある（笑）。ヘラクレイトスは貴族で祭司階級にいてへそ曲がりできむずかしく非常に難解な文章を書いている。エフェソスのアルテミス神殿なんかに行って、子供たちと遊んでいるんです。どうしてかという、「お前たちと政治論議をやるより子供と遊ぶほうがましだよ」と。ヘラクレイトスは例えばギリシア悲劇を書いたホメロスなんかもけちょんけちょんに言っているわけです。あんなやつは死刑、はりつけにすべきだ、と平気で言ったり、それから、ピタゴラスについても、あんな児童に等しいことをやって、知の大発見をしたようなことを言っているけれども、ちゃんちゃらおかしいなどと、せせら笑っている。今ここにいたら、いやなやつかも知れない。でも、大変な人物ですよ。弁証法の原点はヘラクレイトスです。「すべてのものは流動する」（パン・タ・レー）など。そういう高名な哲学者でもアルテミス神殿に行って遊んでいた。ヘラクレイトスは自分の本をアルテミス神殿に奉納しています。だから、例えばギリシア哲学を勉強するときには読まなければならない有名な基本書を書いたバーネットに言わせると、ミレトスとかエフェソスとかのイオニア人には宗教心なんかはぜんぜんない、脱神話的な世界を書いた、というのですが、いまはそんなことは簡単にはいえない。アナトリア半島の地形からいっても、大変重要な問題がいろいろある。

それから地母神というのは日本でも縄文土器の中にありますが、地中海世界でもいたるところに見られます。マルタ島で紀元前 2700 年、いわゆるマルタのヴィーナスといわれるものすごく太った石の像があるんです。私も見てきましたが、マルタ文明には、エジプトよりも古い遺跡がマルタ、あるいはマルタの近くのゴゾ島という島にある。要するにわからないことがいっぱいある。その地母神信仰というのは古代から実は世界的に流布している。アナトリア地方、つまり、小アジアに限っても、先ほど言ったヒッタイトには、クババ、フリュギアにはキベレ、という地母神つまり女神がいたんです。

そのつぎのヘレニズム時代に出てくる女神、地母神がアルテミスなんです。アポロンと一緒に双子として生まれた。ギリシア神話においては、アポロンがデルフォイの神託の地を守っていた大蛇を強弓で射止めて退治しその予言力を奪う。アポロンもアルテミスもギリシア神話でいうとよそもので、もともとオリンポスの正当な系譜のなかでなくて、小アジアの方から入っていった神様です。アポロンはどんどん出世するけれども、アルテミスはだんだんマイナーな存在になるんです。ギリシア神話でも、例えば美の女神アフロディティ、学問の女神アテナなどの活躍ぶりに比してアルテミスの役割は、単なる狩猟の神となっている。獣たちの神様、あるいはアポロンをたたえる女神群のひとりになっている。だから地位を貶められていくんです。ローマ神話のダイアナがギリシア神話のアルテミスです。これはやはり父権性社会である。ギリシアのポリスにおいて、女性は人間扱いはされていない。選挙権もない。市民の中に勘定されていない。奴隷・女性は市民ではない。ギリシアを理解するとき基本的には父権性社会です。オリンポスの神々もまったくそれと同じ。ですからアルテミス信仰がどういうふうに変容され、どういうふうに変小化され、どういうふうに変えていったのか、が問題になるのです。

しかし、エフェソスで紀元 400 年代、キリスト教会がいわゆるエフェソス公会議を開き、ここで、聖母マリアが「神の母」（テオコトス）であるという認定をはじめて下すんです。つまりカソリックのなかで聖母マリア信仰が生き続けられているのは、そのエフェソス公会議以降です。エフェソスというところは、重要なことに、先にいったアルテミス神殿があると同時に、ここに、マリアが 12 使徒のひとりで一番わかいヨハネに連れられてイエス・キリストの死刑執行後、エフェソスに逃げていったのです。

エフェソスの郊外に聖母マリアの家が現在でもある。そこは教会になっている。ヨハネもエフェソスの郊外で死んでいる。

エフェソスのアルテミス神殿はいまは石柱が一本たっているだけです。かつては 120 何本の高さが 18mもある大きな石柱で巨大神殿が出来ていた。その近くに聖ヨハネの教会があり今もヨハネのお墓がある。うそかほんとか知りませんが、使徒ヨハネの聖腕というのが、イスタンブールのトプカプ宮殿の宝物館に飾ってある。

そういうことで、要するに、私が言いたいのは、地母神信仰がクババ（ヒッタイト）、キベレ（フリュギア）、アルテミス（ギリシア）、ダイアナ（ローマ）、とギリシア文明以降、女神たちの一員におとしめられていくが、キリスト教は聖母マリアの形で古い地母神の信仰形態を取り込んで世界宗教化していく。

ところで中世以降の西欧では、男性中心社会になっていって、そのなかで、いわゆる近代科学が生まれてくる。私は近代科学の成立というとき、ふたつの系統があったと、前から問題提起しているんです。なかなか私の真意は分かってもらえないのですが。たとえばいうと、ガリレオ、ニュートン、あるいはアインシュタインまで行くような一つの流れがある。これは世界は書物である、神が書き込んだ書物である、つまり自然は神の作品という立場です。

だから、神が書き込んだその記号と数式を読み取ることによって、神の被造物であっても神にもまさる理性の持ち主である人間には、自然の秘密は最終的にはわかる、理解可能である。これを書物の記号論的な自然観に裏打ちされた科学とっておきます。

もうひとつの流れがあるのです。いやあ、そんなもんじゃないよ、世の中、わからないことだらけだ。いや、森の中を手探りで進むのだから、自然は迷宮だ森だ、という考え方です。迷宮だ、森だということ、強く唱えたのは実は 17 世紀イギリスのフランシス・ベーコンなんです。ベーコンは 19 世紀以降、特に帝国主義的活動が盛んな時代になって以降の学者たちは誤解している。

要するに自然を収奪・征服する原理を最初に唱えたのがベーコンであると考えている。ということで、ベーコンは自然征服的史観の元祖と槍玉に挙げられてきた。現代でも多く人、学者でもそう思っているひが多い。だけど、そうじゃないよと私は言うのです。ほんとうにベーコンを読んでいるかと聞くのです。「森の森」（シルヴァ・シルヴァールム）という世界観、体系をベーコンは打ち立てる、この体系は未完成で、その一部として、オルガノンという論理学の本を書いている。要するに世界は森であり迷宮だ。本当のことは理解不能かもしれない。だからといってまったく自然がわからないとはいえない。自然という森に入って、手に当たるもの一本一本をみなで手分けして記載していこうではないか。そうすれば少しずつでもわかっていこう。だから博物学というのは、実はベーコンが全学問の基礎においたのです。これを忘れてもらっては困る。

全学問の基礎に博物学をおき、その上に自然学をおいたのです。さらに自然学の上にメタフィジカル、形而上学を据えた。ですからこのベーコン的精神にのっかって 17 世紀にロンドン王立協会がスタートしたのです。その初期の事業は、手分けして、いろんな人に呼びかけていろんな博物学的な報告を集めるという方向を持っていた。現代にまでつづいている王立協会誌『ロイヤル・トランザクションズ』誌にそれらは記載されています。自然というのはそんなに簡単にわかるものではない。ひとつひとつ記載していきながら、帰納的に当面、真であると思われるものを取りあげ、また、あらたな事実が見つかった

たら、またそれを修正していけばいいじゃないか。ですから、ペーコンの学問の方法は修正帰納法である、といわれます。事実と思われるものを記載し、そうした事実群に共通して見られるものを当面の真理として、のちに新たな事実が出てきたら、その帰納的真理を修正すればよい、という立場です。

ガリレオ、ニュートン、アインシュタイン的世界というのは、そうじゃありません。ユークリッド的世界の側にある。まずだれしも疑えない真理である公理から出発して、それが正しければ、演繹的に公理から定理を、上から下に導くように、理論を導き出す。そういう立場です。それができなければ数学や物理学は満足しない。だから、ハイゼンベルクがすべての自然法則を導く母胎になる最高法則、宇宙方程式なるものを自分が発見したと、一時期、唱えたことがある。物理学者にはそういうものを見つけ出したいという心情がある。だけどそういう物理学者の信念はゲーデル以降、消えたのではないのでしょうか。ゲーデルが樹立した不完全性定理というのがあって、実はどんな精緻な理論体系を創っても、その理論体系のなかで、説明されないことがかならず発見される、つまり不完全であるということを定理として述べたのが不完全性定理なんです。だからもっとも完全な理論というのは、成立し得ないということをゲーデルは数学的に証明してしまったのです。とはいっても、これは理論構築の上では逆に勇気付けられる結果にもなった、ともいえます。先行理論には必ず不備が見つかるだろうからです。

これは 20 世紀以降、現代に至るまでのひとつの流れです。自然のイメージとして迷宮、森であるという流れは、現代の博物学やエコロジーでも注目を浴びています。これは当然のことだと思います。これはさきほどの女性原理、女神が貶められていく過程の裏返しとして、現代でも再考せざるを得ない問題です。だから、そういう意味で、ギリシア文明を再考するにあたって、アルテミス信仰というものに私は目をつけている。これはいわば、ギリシア文明を考えるときの、私にとってのキーワードなのです。以上です。

リプライ講演

いいだもも

1 今日の秋葉広島市長の平和宣言

今日は日曜日で、しかも酷暑の中を、こんなにも 40 名をこえる参加者がございまして、著者としてのわたくしとしては、大変に恐縮に存じております。正直に言って、さきほど、なだいなださんから、いいだももとよく間違えられるといわれていますが、それはいつもわたしのほうが得しているんです（笑）。

今日は、広島の日（8月6日）なのですが、先ほど、司会者の猪野修治さんのいつもながら周到きわまるご挨拶の中に、今日の秋葉市長の宣言について、「原水爆禁止運動が後退している」というご発言がありました。ぼくもそれを聞いてからここに、今日、来たんです。秋葉さんというのは、わたしにとっては、永年のポン友なのですが、猪野修治さんが、かれが今「後退」「あいまい」になっていると、おっしゃったのですが、かれの印象は、わたしが今日、聞いた限りではむしろ、「沈痛」になっている、という印象を間違いなく受けました。

これは、時代により深く沈潜しているところがある、との感じをわたしとしては持ちました。単に印象ですが、現実問題としては、広島の当事者の市長としては、或る意味では当然のこのようにわたしとしては思います。広島・長崎以来の「原子力の世紀」「原子力の時代」が呈していることは、戦後が、いわば欺瞞的な偽りのなかで「平和」とされていることとは別にして、わたしどもはどうか生きながらえてきておりますけれども、本質的には問題の根本は何一つ解決していない、とおたがい痛感させられているわけです。

その一つめは、「原発」という核の問題が、現に全く解決していない。核世界戦争が勃発しない世界平和が維持されているのは、非常に逆説的なことですが、米ソ冷戦以来の核の「過剰蓄積」による相互循環なんです。いわば相互緊張の「死の均衡」のなかで、この欺瞞的な「世界平和」は保たれているのであって、わたしたちはまだ、完全軍縮とは非常に遠いところで「平和」を貪ぼっているにしか過ぎない。もうひとつは、原子力時代という「偽りの平和」が、われわれ自身の或る意味での、貪ぼりと或る程度の納得を得ている、ということです。

日本はやはり、ヒロシマ・ナガサキの当事者ですから、世界的に言っても、日本の認識は、それなりに非常に高度なのです。「原発」「原子力の平和的利用」とは、原子力そのものの「商業的」利用、産物なのであって、ですから、それはやはり、放射能は、こうして明るくしている限り、どうしたって、日本列島・世界上に累積してこざるをえない。それは、処理の方法が根本的にはない、というところで、核燃料サイクルも現にみるように、フランスへツケをまわして、六ヶ所村へ最後のシリを持って来つつあるだけのことでして、その実態は、ほとんどパンク状態にあるわけです。そういうような状況証拠を通じて考えてみますと、秋葉市長ならずとも、「沈痛」にならざるを得ない、ということがあるのではないか、とわたしは強く思います。

今回は、イスラーム学者の三木亘さんにご登場していただきましたが、そのかれが懇親会の後、カラオケに行きたいというのです。かれにカラオケの趣味があるとは、わたしは全く知らなかった（笑）。

じゃあということで、みんなでカラオケに行ったのです。実に七十年来のわたしの友人ですが、驚いたことに、三木亘という男は、今の若い人の新しい歌を全部そらでやるんですよ。カラオケ好きのわたしも、これにはすっかり負けちゃいまして、やはりイスラームというのは非常に新しいものに関心があるのだ（笑）、とわたしのようなマルクス主義者としては（笑）強く思いますね。今日も、後でのカラオケを、大変楽しみにしております（笑）。みなさんも一ついかがですか（笑）。

2 ギリシア哲学の始まり

さて、なだいなださんと金子務さんのおふたりのお話について、わたしとしては、ふたつのことを付け足してお話したいことがあります。お二人のお話に詳細にコメントすることは、とうていわたしごときには出来ませんが、その前には、金子務さんが前回、「アルキメデスの墓」を探して廻られた、ということ承り、実にすばらしかったなあと思いました。金子務さんのお話では、「アルキメデスの墓」が発見されて、そこに彫られていた文字がほうぼう消されていて、それを読むのがなかなか困難で困った、というのですが、それを苦心して解読された結果、アルキメデスの原文が完全に解読された、と。これは本当に、何世紀にも無い朗報でして、わたしたちは、アルキメデスの原本を手にして、恐らく近くその訳が近く出るのだろう、といとも楽しみに期待していますが、非常に楽しみで、それを読んで、もしかしたら、この超枕本の第4巻を書けるのではないかと（笑）と、心待ちにしているのです。

要するに、アルキメデスというのは、やはり古典古代ギリシア文明を考える上できわめて大事な人物であることは、何度も強調されてきておりますが、金子務さんがおっしゃったイオニアです。エフェソスが大事なんです。プレ・ソクラテスなわけなんですね。ギリシア哲学というのは、このイオニアの大地から始まるわけでしょう。

要するに、タレス流に言えば「万物は水」だということですね。それから、アナクシマンドロスは「空気」だと言っている、それからはじまってアナクサゴラスあたりの自然哲学が、として大事なんですね。これが、ギリシア哲学の始原である〈ミレトス自然哲学〉のエッセンスです。これが、人間的な哲学的思考の最初の原点、ほんとうの「アルケー」ですから。

それが、ソクラテス、プラトン、アリストテレスというところに付け替えられてしまったというのが、古代ギリシア思想史のプラトニズムによる贗造の始まりなんですね。プラトンの〈イデア論〉などというあんなものは、まったくのイデオロギッシュな迷信ですよ。偉大なる古典ギリシア哲学はやはり、〈イオニア自然哲学〉から始まった。ソクラテスというのは、要するに、自分の家のなかでまんじりともせず、個人がどういうふうによりくり算段して生きるかということですから、「私小説」でして、高級な哲学的思考などでは、もともと無いですよ。ですから、プラトンの最後の高弟で、その継承者である、ということになっているアリストテレスは、その実は、プラトンの〈イデア論〉には全く承服していないで、かれの論である〈フュジカ＝自然学〉は、その内実は、タレス以来の〈ミレトス派自然哲学〉の完全な復権なのであって、この〈フュジカ〉がなければ、もう一つのかれの主著である〈メタ・フュジカ〉つまり〈形而上学〉もまた、ありえない。

もう一つは、イオニアのあと、アテネのプリクレスの民主主義の最盛期の時代ですが、その時代には、プラトンとアリストテレスが極端にその時代の賢者である〈ソフィスト〉をけなしてしまうために、それぞれに、一冊の本を作ったくらいですから、それは実に大変な贗造・歪曲の理論的作為ですけれども、

当時のアテネの全盛時代、ペリネネス時代には、別の本格的流派が「ソフィスト」でして、その太祖はアルキメデスですから、だからアルキメデスの思想は、ほんとうに重要で、いくら学んでも学びきれないくらいに巨大な思想だと思います。

その以上三つの点が、思想史的な転換点として大事なんです。金子務さんがおっしゃったように【編集部注：地図を示しながら】、この上が小アジアですから、だから、実はギリシアという西のほうではなくて、東のほうなんです。わたしたちが〈オリエント〉と呼んでいる、「光は東方より」というように、東から歴史の光は射してくるんであって、これをもっとこっちの方向にどんどんいけば、インドに行き着くわけです。アレクサンドロス大王の大東征ですね。そのインドからさらに中国へ行けば、その先は最後にはわが正倉院に辿り着くわけです（笑）。こちらのほうから、ずっと来ているのです。

3 ヘーゲル『世界史の哲学』の問題性

みなさん、ヘーゲルの『世界史の哲学』というのは、前回も申し上げた通り、あれはおどろくべきヨタ哲学本でして、そもそもの世界史の始めは、いきなりモンゴルからはじめさせられている。いわゆる「一人だけの自由」の神聖な絶対王権国家文明です。つまり、チンギス・ハーンだけが自由な人だ、とかれヘーゲルは言うわけです。これは、かれら西ヨーロッパ人は、大蒙古帝国の西漸の力によって一度征服されかけた、という、かれらなりの世界史観をその時の「トラウマ」から自分の史観を組み立ててきている。

モンゴルの侵略で凌駕されかけたということが、非常に怖かったわけですね。だから、ヘーゲルの「世界史」は、モンゴルからいきなり始まるんですよ。それでずーと来て、ペルシア、ヨーロッパまで来る。マア、わたしの日本史で言えば、「元寇」です。わたしのあそこで「モングラッタ」（笑）。

ヨーロッパまで来ると、そのとどのつまりは、ヘーゲル自身が自画自賛して書いているプロテスタントのプロイセンでして、そこで「万人の自由」が実現され、そのところで、「一人の自由」のモンゴルとは対照的な、最近フランス・フクヤマが強調しているように、「歴史そのものの終焉」が宣言される。ざっとこういう世界史の行程が構成されているわけです。これで、ヘーゲルの「世界史」は終わりなんです。そこで、ヘーゲルは、コロンブスが〈大航海の時代〉に発見した新大陸のアメリカというものを、アメリカは「未来の国」だから分からないといって、かれの「世界史の哲学」から先送りしてしまっている。

21世紀の現在、よかれあしかれ、世界の中心はアメリカでしょう。それからこれでは、ロシアというのも「始まりのモンゴル」の以前に置かれていますから、当然出てこないわけですよ。ところが皮肉なことに、米ソ両超大国の冷戦時代こそが、わたしたちの時代であったわけですから、そんなことは、ヘーゲルの「世界史の哲学」では全く何一つ理解できなくなってしまう（笑）。

そもそも、たとえば、日本のわたしたちなんかは、なにしろモンゴル以前の「現人神」御一人の自由しかない（笑）お国柄で、人類史の舞台にただの一度も登場しないで、そのまま、虚空に消えさせられてしまっております（笑）。

こういう偏りが、なんでヨーロッパのどまんなかでヘーゲルの世界史に生じたのかということ、この本で明らかにしたのです。それは、つまらないことを言っているようだけれども、非常に大事なこと

です。

だって、文明の光はもともと東から来るわけでしょう？ それで、ギリシアから二千数百年、今日まで来るわけです。古典古代ギリシアは、ここから歴史が始まったというが、そんなことはないんだ、その前に六千年間のミノア・ミケーナイ地中海文明があったじゃないか、とこの本は声を大にして実証しているわけです。

金子務さんのお話に倣って、小アジアのほうへ話を持って行って、エフェソスはもちろんのこと、そっちのほうからアテネへと、アポロンにしても、ディオニューソスにしても、アテネのパンテオンに鎮座して居る神はみんな渡海してやってきた。そして、金子務さんがおっしゃったように、ピュルトンというデルフォイの守護神と結びついている大蛇ですが、これを退治して、そのもともとの縄張りのところに、アポロンの神を主神として鎮座させて、デルフォイのご神託を発したところから、歴史が始まる、というでっち上げなのです。

これからもっと西へ行くと、今度は、イタリア半島がありますから、ここでローマという世界帝国ができるわけでしょう。きょうもその話をして、そういった西欧伝来のヨタ話（笑）の一切を、打ち止めにしなくてはならないのです。

大まかにいうと、東から西へときて、そのどんづまりが 21 世紀の今の西欧中心的世界史観というのであって、そのように再吟味してみますと、アメリカ大統領のカーボーイじゃないが（笑）、今、イラクに戦争に行こうとか、イランに戦争に行こうとか、そういうばかばかしい猿知恵しかでてこないわけで、それに乗っかる人が、今日の日本の自民党さんなどにワンサと居るわけです（笑）。

男のヒステリーというのもあるということですが、現代、だいぶ解放されているというのに、男のヒステリーというのは、どうなんですかね（笑）、ますますその病症が亢進してきて、いつも弓なりになって引き付けの発作を起こしているんじゃないかな（笑）。歴史的にそうなんではないですか。あのあと出てくるのが、今度はですね、あれは顔を見ているとよくわかりますよ、「不安神経症」ではないですよ。あれは、ヒステリー症の最たるもの。男のヒステリー（笑）。だから、今の世界と日本は、男のヒステリーが全盛時代だと考えると、精神衛生上、なだいなだ先生の診断をぜひとも受けたほうがいいたろう（笑）と、わたしは思っております。

馬鹿ばかしいことを言っているようだけれども、ここはなかなか大事なことなのです。ヒステリーというのはまあ、子宮の病気だということは、なだいなださんがおっしゃったようなことですが、ヒステリーをあげつらった、当時のいかさま師たちが、女のヒステリーをタネにして金もうけを盛んにやらかしていた。これはつまり、神様に触れたんだ、というふうに物事を持っていったが、実はそうでは全くなくて、これは人間の病気なんだということを、ヒポクラテス先生が明らかにした。いわゆるヒポクラテスの〈神聖病〉論ですね。

これを明らかにしたヒポクラテスが着眼したことは、岩波文庫で今は誰でも気楽に読めますし、みなさんもぜひともお読みになってみてください。ものすごく重要なところですよ。だから、何でも神様のせいにして、靖国神社に行ったりなんかする者が今でも居る。小泉なにがしとか今でも居るわけです（笑）。ヒステリーであれば（笑）。そういうことをタネにして、人間から起因している問題を、何でもかんでも神様のせいにして、人々を脅しつけて、これでケッコウ商売にしているわけです（笑）。

ですから、そういう欺瞞から解放されるのは、ヒポクラテスというのはまだ、古代ギリシアのお医者さんですから、それ以前に、すでにすこぶる健全な時代が人類にはあったわけですね。そういうふうに歴史をわざわざひっくり返す悪い趣味は、わたしには全くありませんけれども、淡々とありのままの歴史を踏まえて、ものごとを素直に考えてみる必要が、どうしてもあります。

4 人類文明の暗黒面の重要性

なだいなださんと金子務さんのお二人のお話で、なるほどなと思ったことがあります。お二人とも、同じことをおっしゃった。なだいなださん流に言うと、人類の文明というのは、暗黒面の続きなのです。やはりこの暗黒面というのが非常に大事だ、ということ。金子務さん流にいうと、なんですからね、大地母神ですから、女神が抱えていた暗いところのハデス＝地獄の地下の世界、そういう真っ暗な地下のところに、やはり人類の根源というのが在る。まったくその通りだ、とわたしは思っているのです。

古典古代ギリシア文明というものが、現在の西洋中心主義的な世界像・世界観が出てくる発端だということは、要するに、西洋中心主義のエッセンスが、そのアポロンの明晰性のなかにある、ということです。

それを明らかにしているのは、これで第1巻をつぶして第2巻にですが、古典古代ギリシア文明の、特にアテネの文明の社会構成体的な勢力の根本は、第一に、奴隷制の文明であること、第二に、男権制的・家父長制的な文明であること—これです。だから、アテネの女性は、奴隷以下的な非市民とされている。そういう虐げられた境遇にあった。つまり、アテネの民主主義の市民というのは、20歳以上の成人男性に限られておったということに、人びとがこれまで避けて通ってきている決定的な問題があるのです。

ニーチェが、二〇世紀的現代が開幕した初頭に、自らの狂気を賭して明らかにしたように、古典古代ギリシア文明というものが、「音楽の精神」を以ってするトラジェディーニ、つまり「悲劇」の文脈を述べつつ、そこにおいても、アポロンではなくて、もう一人のデルフォイの洞窟の方にうずくまっているディオニューソスの幽暗を初源として、古代ギリシア文明は在る。そして、かれディオニューソスが、年の暮れに呼ばわると、アテネの女という女が、亭主も投げ棄て、家庭も投げ棄てて、みんな市中から一斉に飛び出して来てしまって、山へと走り、一晩中、飛び跳ねたり、踊ったり、生肉を喰ったりするのです。自己回復です。

2500年前で切らないで、その前に8000年間に亙る地中海世界史があつて、そこは「貢納性の文明」であり、「母系制の文明」であり、古典古代ギリシアの家父長的・男権文明では全く無かった。そのことを、第三巻で書いたわけです。だから、ディオニューソスはたしかに男の神ですけども、これは時代に即して言えば、アテネの一人の市民であつて、デルフォイの神殿に鎮座していますけれども、これは共同幻想ですから、共同幻想という、万人の耳に一斉に響いてきた「共同幻聴」です。共同幻聴というのは、ぜんぜんばらばらに音が発せられても、それが意味としては同じ言葉になっている。

それを聞くと、アテネのポリス国家の民主主義的だというふうに一般に盲信されているアテネ・デモクラシーという、非常に非民主主義的な日常生活のなかで暮らさせられている女たちはみな、完全にヒステリーになっているわけです。女のほうにヒステリーが多いというのは、社会構造上、当然のことで

して、きちっと分析してそれを認めておく必要があります。そうすると、共同幻想でディオニューソスの天から喚ばれる声を耳にしたアテネの女たちは、いっせいに、亭主と子供たちとをほったらかして、アテネと周辺の都市から山に飛び出して、いわゆる「マイナス」の女に化してしまうわけです。

そのことを教えないギリシア史というのは、そもそもがインチキなんです。生活的には非常に大きな日常なので。山谷に走って行って、そこで、女たちは小アジアからさすらってアテネへと渡海してきたディオニューソスに従って、八千年以前からの母系制であったミノア・ミュケーナイ地中海文明の歴史復活のドラマを開始するのです。

ほんとうの話ですけれども、長く書いてありますからぜひお読みいただきたいのですが、山へ走って行って乱痴気騒ぎをするアテネ民主主義下の女たちは、そこで出会う人間は、子供も含めて、みんな殺してしまいます。そして、その生肉をバリバリと啖うのです。生肉を啖うことによって、ヒステリーから解放されて、蘇生するわけです。歌ったりはねたり踊ったり、狂乱の踊りをやり、これでもって近代悲劇を濾過する。濾過するのは、ディオニューソスに尽くしたがる女どもですから、そういう「バッカス」「マイナスの女」というかたちで、文明的に絶えず蘇生しながら、この世に女たちは実在している。

これは、一九世紀にフリードリッヒ・エンゲルスが言った、「世界史において女性はいちど世界史的な敗北をこうむった」ということが、関係してくるわけです。それからあとは、わたしたちの問題というのは、一度、世界史的な敗北を蒙った女性たちは、「敗者復活戦」としての復権というものをやっているか、やっていないのか。やっているとするれば、どういうかたちでやっているのか。今日にまで延々とつながっている問題ですけれども、それはディオニューソスの「バッカス」の徒にさかのぼって、亭主をほったらかして家から飛び出していく、あの形式です。まことに髪を振り乱して壮烈きわまるものだったろう、と思います（笑）。

「ギリシア悲劇」が伝えているのを見ると、女たちの反乱を観察しようとして、テーバイの若い王様が出てきて、女装して松の木に登って、バッカスの女神たちの挙動を逐一見届けているわけです。ホレ、あそこにこちらを伺っているものがあるぞと、かの若き王の母親と叔母さんが先頭になって、叫び出し、その若い王様を松の木から引きずり下ろして、ズタズタに切り裂いて、その遺体を担いで、意気揚々とアテネの町に帰ってきているわけです。かれの母親と叔母たちが先頭に立って、若い王様の首をチョン切ってしまうわけです。イギリスの王様の首をチョン切ったピューリタン革命、フランスの王様と王妃の首をチョン切ったフランス大革命なんかよりも、もっともっと壮烈至極のものでした（笑）。

人間の外に自然があって、人間が生まれる前にもおそらく自然は在るでしょう。自然史と人間史との関係についての非常に初歩的だけれども深遠な問題は、古典古代ギリシア以来、実は考え抜かれているのですから、そのときに、パルメニデスという最初のギリシア哲学者がいて、これはぼくの整理によれば、存在論的・認識論的にトータルな把握の仕方というものを、人類史上、最初に提起した大思想家なんです。

かれパルメニデスの哲学は、「哲学＝存在」という一元論であった、とされています。このアイデンティティーそのもの、つまり自己内の同一性からは、一切の動態＝ダイナミズムは出てきようがないように、一見見えます。それがそういう、パルメニデスの哲学の、「一の多」「多の一」という動的なダイナミズムを、「一と多」との弁証法として展開・展示されています。それはなぜなのか？ つまり、人間の意識によって存在が存在として自覚されることによって、存在＝思想という、アイデンティ

ティーの自己同一性が、「一の多」として歴史的な全ダイナミズムを展開してゆく、という弁証法論理が明らかになったわけです。

存在が客観的に在るというのだけれども、それを掴んで知るものがなければ、有るも無いもわからない。だから、存在は非常に悩ましい。いつもそれを知覚する認識するものとワン・セットになって生ずる。それで、近代のルネ・デカルトの『方法序説』でいうと、延長としての存在があつて、心としての自我の認識があつて、〈コギト・エルゴ・スム〉と、あいなる。延長と思惟というのは二元論なんですが、二元論に別けてみたところで、それがワン・セットに成って、認識論的にかつ存在論的に存在が存在する、ということにならざるをえない。

これは、現代のマルティン・ハイデッカーという哲学者の意見なんですけれども、そういう存在論的存在の構造というのが、やはり認識されなければ存在しない。その面を極端にまで考え詰めるのであつて、そういうものが有るか無いか分からないが、考えてから有るよ、ということにあいなる。そういうことでなければ、根本的に言って、わたしたちは、存在論的・認識論的な〈有〉はありえない、という悩ましい問題にぶつかるだろう、と思います。

5 文字に記録された歴史の構造と意味

この問題は、文字による記録による歴史の発生の確認という問題と、重なり合うのです。エンゲルスが、マルクスと一緒に『共産主義宣言』を書いてからあと、〈注〉をつけまして、「原始共産主義」を歴史の始まりに据えたんですが、その「共産主義」というのは、文字による記録が始まって以来、歴史における共産主義ということ、かれエンゲルスは、明らかにしたのです。

これはなんでもないようなことなだけけれども、ものすごく深遠な問題です。つまり、歴史の端緒とは、共産主義の一番もとにあるものではなくて、文字に記録された歴史の端緒なのです。文字がそこに在るということに、すでにそこに自分史的な啓蒙による文明開化支配があり、そこに権力がある、ということになります。そうで有る以上、「原始共産制」というのは、むしろこの藤沢市の片瀬山に住んでおられた中村吉治博士が喝破されたように、「身分制文字社会」として、すでに「無階級社会」を解体して出てきているわけです。そこでは、それからわたしたちの階級の歴史が始まるわけです。本来の原始共産制は、まだ認識されていない歴史なんです。つまり、「先史」社会です。

認識論的・存在論的な歴史の捕まえ方をしますと、個人が共同体になっていないのはまだ歴史になっていない、ということになり、歴史ということ自体が、或る種の不合理性なのです。にもかかわらず、現代では、人間がそこに介入する余地のない自然史とか宇宙史だとか、というものもまた、歴史的な構造を持っているということが、判明されてきている。これもよく考えると、アタマがグルグル廻りまわってクシャクシャしてまとまらないくらいです（笑）。大変な問題なんです（笑）。

どういうわけか。宇宙とか、自然とか、地球とか、そういうものは、歴史的な構造を持っていますから、人間は、そこには、本来的には関わりが全くないんです。人間なんか一人も居なくたって、それらはちゃんと回転している。だから、弁証法は、人間史から始まる、〈自然弁証法〉というのは、エンゲルスの論考だと、20世紀現代のマルクス主義ルカーチ・ジョルジュ先生ですが、かれはそんなエンゲルスの〈自然弁証法〉なんてものはどこにも無い、自然はまさに人間がそこに居ないにもかかわらず、チャ

ンと運動・展開しておいて、〈自然弁証法〉とは、エンゲルスが概念化して ひねりだしたものであって、弁証法は本来、人間の意識から始まる、としたわけです。もちろん、そういうルカーチの考え方は、上下顛倒した間違いなのです。

むしろ、そこから今度、逆算して考えてみますと、人間の文字によって記録された歴史というものも、そういう自然史が歴史的構造を持っているということの、或る種の延長というのも、ちょっとおかしいけれども、「アナロジー」と言ったらいいかな、アナログアでもって、そういう構造を持って現在に至っている、そういうふうを考えるのがいいだろう、とわたしは考えています。

ルカーチ・ジョルジュの〈自然弁証法〉否定に反して、それが果たしてエンゲルス式定式化の形をとるかどうかは、また別問題としても、自然とか宇宙とか原子とかいった物質には、人間が地球上に発生した以前から、自然と歴史はちゃんと弁証法運動を不断に展開しているわけです。

だから、マア、わたしたちの存在論的・認識論的に生きているとさえ言える〈狭義の歴史〉をみてとって、このような三巻本を、わたしは書いたわけですがけれども、歴史を見たり、見出したりするのは、認識の力が要るわけです。或る種の人間の認識力をもっている概念・範疇・カテゴリーというものがあるのは、歴史というものも視えてくる。言い方は非常に気をつけなければならないのですが、少なくとも歴史の意味がそこでつかみとられてくる、という構造を持っているのは、確かなことです。

だから、「観念論」というのは、世界観の歴史観を先ず大事に、そういう概念とかカテゴリーとかの「観」というものがなければ、歴史は視えてこない。すべての歴史に意味が出てこれない。視点があってこそ、物事ははじめて視えてくるわけです。要するに、時代を総括的に把握するさい、主要な概念とか範疇がどこにあるのか、というテオリア「観」が、どこにあるかを、よく考えてみる必要がある。だから、わたしは、「念力」だ、というわけです（笑）

そういう観点から観ると、まず、最初にこの本を総括的に考える場合には、世界史的な近・現代を考えなければならない。それから世界史的な近代を考えなければならない。世界史的な近代というのは、わたしたちが生きている、〈大航海時代〉以来、あるいは18世紀の「産業革命」くらい、わたしたちは「市民概念」としての資本主義という歴史的、経済的な極めて特異な時代の裡で「生きている」のでありますからして、それ以前のさまざまな共同体の世界史が先行・先在して有るわけでしょう。世界史的なプログラムというのは、範疇とか、概念として、どう違うかというところを、ちゃんと観なければならない。

そこには先ずもって、もろもろ・さまざまの多種・多元・多様・多変な共同体国家社会があつて、それと対比して見て、世界史的近代というのは、いかなる意味でも共同性市民社会なわけのものです。

「市民社会」というのは、要するに、商品・貨幣経済が支配することによって、あらゆる共同性がそこでは解体してゆく。解体された近代のなかにも、たとえば、「家族」といった最古の共同体は、「最後の共同体」として残存している。家族の解体というのも、さまざまな形で近代化・現代化過程で解体させられてゆくわけですがけれども、市民社会というのは、明るだけ一方の啓蒙性のものでなくて、つまり、共同体というものを、商品・貨幣経済の発達によって物象化するために、いかに非人間的な「合理化」社会になってゆくか。マックス・ウェーバーが、「世界合理化」という人類史の宿命を見届けて、「合理化の檻」と名付けた問題です。そこで再び、世界史は「ヌース」＝「理性」による物象化の檻と

いう形に捲き戻るわけです。

聖なる宗教的価値によって価値統合・社会統合されている、もろもろ・さまざまの共同体が、商品・貨幣経済の発展によって崩壊を遂げてゆく最後の場面に、わたしたちはいつも三面記事的につき合って生きておりますが、それは結局は、「世界帝国」へと行く。先ほども述べた〈オリエント世界帝国〉〈ヘレニズム帝国〉〈ローマ帝国〉〈ドル・核世界帝国〉の問題です。

これは、ものすごく大事な問題点なんです。前近代の共同体と世界帝国、そしてそれから、イマニュエル・ウォーラースタインのいう「世界経済」です。

したがって、未来の「高次共産主義」という将来展望は、資本制世界の発展を「世界経済」として濾過した上での「世界帝国」共同体の高次復活という形にならざるをえない。まあ、「高次共産主義」の時代というのは、もろもろの多数の小さい共同体国家社会とそれを自由・平等に連結した世界帝国なんでしょう。

これは、例えば、西ヨーロッパ人が「トラウマ」になるほど把握するのが難しい、12世紀にユーラシア大陸を一元化したチンギス・ハーンの「世界帝国」の問題です。「モンゴル大帝国」です。三代目の「元」をフビライ・ハーンによって作られた、それは「元」と位置づけられた、まったく一元的にして始源的な帝国です。

そこでは、モンゴル人がキャップであるけれども、中央アジアのあらゆる人種の「色目人」が、北京に集結して、非常にインターナショナルな「世界帝国」が出来上がった。そのことによって、ユーラシア大陸は、「シルク・ロード」と「南海航路」に沿って、一元的・普遍的な交通＝フェアケールが安全に確保されるにいたった。

マルコ・ポーロの『世界遊覧記』や、三蔵法師玄奘の『大唐西域記』や、イブン・ハルドゥーン『歴史研究序説』などを観れば、そのことがよく分かります。これはつまり、人類文明史的な〈近世〉というものの典型を作ったわけです。〈近世〉がなければ〈近代〉もありえませんが。〈近世〉というのは、共同体のギリギリのところで、近代の商品・貨幣経済社会を呼び起こす時代概念規範です。

6 「近世」の歴史学的規範概念

この〈近世〉という歴史学的な規範概念は、「元」に滅ぼされるにいたる「南宋」を専門的に攻究した、わが湖南・内藤虎次郎先生が先駆的に創造した歴史概念であり、これをマスターすれば、マルクスが「中央集権的封建制」と形容矛盾的にアナロジーした江戸時代の「近世」的性格も明瞭になり、ひいては西洋史を含めて、世界史的な〈近世〉概念が、西洋的〈近代〉の前史として、明確に位置づけられてゆきます。

わたしたちは、ヨーロッパ人とちがって、古代ギリシアが、世界帝国を経験するのは、アレクサンドロス大王の「ヘレニズム帝国」であるということが、パッと分かるのは、内藤湖南の〈近世〉概念の念力があるからです。それが世界史的に滅亡したのは、今日の主題である「古代ローマ世界帝国」の衰亡史によってです。

しかも、ヨーロッパ人にとって、なんで、ギボンの『ローマ衰亡史』が、ベスト・セラーになったの

か？ 今の話で塩野七生さんが膨大なローマ帝国の歴史を書いていますけれども、それは、あまりインパクトが無いのです。なぜかという、彼女には、このことのかんじんなモチーフがよく解っていないからです。

ヨーロッパ人にとって、ギボンのそれがどれだけ大変であるかという、何と言っても、ローマは「永遠の都」なのです。「永遠の都」だから、きわめて安気に国家的に、すべての道が通ずるように歴史が地理学的に出来上がっているわけです。そう思って、西ヨーロッパ人は久しく暮らしてきた。それが滅んじったわけですから、これは大変ですよ。それも第三巻で書いてありますから、読んでいただきたいが、「西ヨーロッパ帝国」が滅んだことを、西ヨーロッパに暮らしている人自体がびっくりして、世界が滅んだ、滅んだ、と騒ぎ出した。

こちらのほうに行くと、ビザンティンの方はどうなんだ、あそこにはちゃんと「ギリシア帝国文明」と言って、「ローマ世界帝国」がちゃんと継承されていたではないか、ということが出てくる。西ローマ帝国の狭いところでは大騒ぎをしているけれども、「東ローマ帝国」として龐大にかつ高度なローマ世界文明が残っているわけです。なにしろ、「東ローマ帝国」はヨーロッパ人によって大騒ぎされた「西ヨーロッパ帝国」の滅亡から、さらに千年間近くも生き延びたわけですからね。

ビザンティン文明が、西ローマ帝国文明よりも蒙昧であるなんてことはまったくありません。そういう通説は、西ヨーロッパ中心主義がでっちあげた迷信的虚構です。「トルコ帝国」にまで残っているビザンティン文明というのは、そこにも、キリスト教、ギリシア正教、ロシア正教があって、また、ロシアやトルコに生きている人びとを含めて、世界の唯一神教は、ローマ・カトリックの方にだけ在るだけではなくて、ロシア正教の方にも在ると、信じていたのです。イスラームにしたって、ギリシア正教、ロシア正教、ビザンティン正教ともども、したがって、これはやはり、西ヨーロッパのカソリック主義からは、はみだしてしまっていたのです。

それは、西ヨーロッパ人にとっては、大変なことなんです。東ローマ帝国は、西ローマ帝国よりも千年間近く長く持った。つまり、コンスタンチノーブルがイスラームによって占領されるまでは持ったわけです。このビザンティン文明は、非常に偉大なものです。そういうふうに、今日の高校式アンチヨコの歴史教育の物事を習っていることを、あまり鵜呑みにしないことが必要であろう、とわたしは強く思うんです。

7 東アジア文明と中華文明

それで、世界史における〈前近代〉というのは、さっき言った、文字に記録されたのが歴史だ、ということから言うと、東のほうは、司馬遷が書いた『史記』なんです。司馬遷の『史記』は、とても面白い史書なので、ぜひみなさんお読みいただければいいと思います。これはどういう世界史観かという、要するに、秦の始皇帝で言いますと、「万里の長城」を築くんです。「万里の長城」という長大極まる大建造物、つまり、その向こう側の外の方は、大草原で遊牧する匈奴以下、突厥、そして、大蒙古へと続く、偉大な遊牧文明民族です。

もちろんのこと、秦の始皇帝がはじめたほうの中国文明というのは、これもまた、世界の五大河川大文明の中で唯一現在にまで残っている、非常に偉大な農耕文明ですけれども、基本的にこれは農耕文明

であって、小麦とか高粱とかの文明ですから、いつもその農作物を狙って大草原の遊牧の民が入ってくる。それに悩まされ続けたのが、2000年を超える東アジア文明＝中華文明であったわけです。

そこに「認識上の識別線」をキチンと引いて、中国の偉大な王朝国家というものの原理を明らかにしたのが、始皇帝の「天下草創」であって、これが、司馬遷の『史記』の認識論的な解釈だろう、とわたしは思います。具体的に言えば、漢の武帝が、始皇帝の「秦」の遺産を承継いで、中央アジアの方向まで中華帝国を一元的に血統的人脈を含めて、歴史上、統計的に解明した、というものです。

日本という、東アジア唯一の帝国主義国にまで上昇した、勢力東漸下での近代化に接続されたことで、2000年生きてきた偉大な中華冊封朝貢体制が、明治維新以来あるいは辛亥革命以後は、無くなってしまふわけであって、この現代へと接近する勢力東漸下でのアジアの近代化過程を、セポイの乱→太平天国の乱→明治維新として、不可分にアプローチしてゆかなければならない。

そのように考えてみますと、例えば、隋の煬帝というのがあります。この隋は、秦同様な「世界帝国」かということ、大運河を作るでしょう。大運河を作るというのは、中国の北と南とを、つまり、江北と江南とをつなげる。江北文明であった古い中国を、揚子江文明である新しい江南文化につなげて一元化したから、これで、東アジアにおける「世界帝国」の大中原が出来るわけです。

煬帝がそういう作り方をするから、煬帝は、日本と琉球に使いを遣わして、自分の領分にしようとする。琉球がどこにあるかは、かれらにはちゃんとわかっている。こちらの南西諸島の方では、大清国との対外関係では中華の側からの呼称のままに「琉球」と呼び、島津のお国入り以降の対内関係に即しては、「沖縄」あるいは「ウチナー」と呼ぶ。

台湾は「蓬莱島」という島であった、と観られている。かれ隋の煬帝は、多分、琉球なり、フィリピンなり、台湾なり、そういう自分の帝国の範囲を広げた「世界帝国」を構想しており、だから「世界帝国」を表象するためには、秦の始皇帝のことを思い浮かべなければならない。こうした中華冊封朝貢体制としての農耕文明、中華世界帝国であって、それが、明治維新と辛亥革命とより以後の「脱亜入欧」「富国強兵」「殖産興業」の近代化過程で「日韓併合」「琉球処分」「台湾征伐」へと続いて行ったわけです。

西のほうは、金子務さんがおっしゃったように、ヘロドトスの〈歴史〉から始まります。ヘロドトスの〈歴史＝ヒストリアイ〉というのが、なぜ世界最初の歴史書かということがあります。かれは、文字化されていない小アジアのことをまとめていますけれども、圧倒的に、古典古代アテネに代表される、地中海世界の都市ポリス国家が、ペルシア大帝国を打ち負かした「驚異」のことをヒストリー化したわけですが、そういうことで、主題は何かということをつらやうで、オリエン特やエジプトやペルシアの方のことを、みな失念しちゃっている。

さっきの概念範疇でいうと、ペルシア世界帝国と地中海の世界帝国の覇権を争ったアテネが、今度はスパルタとのギリシア都市ポリス文明内の「内乱」の出来（しゅつたい）です。ペロポネソス戦争の長期慢性化へと突入してゆく。ここにヘロドトス、ツキジデスの〈ヒストリアイ〉に収斂されてゆくわけです。

ヘロドトス的地中海世界史では、その歴史の初源は、ポリス諸国家、だということになるわけです。この地中海世界の覇権戦争は古代の「世界戦争」です。そこでもって、歴史が東西に分かれたでしょう。

歴史はそこから生じた、とヘロドトスの〈ヒストリアイ〉が謂うわけですから、なんでそれがかれにとって「驚異」になったのか？ ペルシアが負けてアテネが勝った、だから、かれヘロドトスは、それが驚天動地の「驚異」だとして、〈ヒストリアイ〉を書いたのです。ペルシア大帝国が敗れて、眇たるアテネ・ポリス国家が勝った、ということに、「ヒストリー」信仰というのが認められる。その「ヒストリー信仰」が、貢納制や奴隷制や男権制であったことが、ヘロドトス〈ヒストリアイ〉以前の大主題でした。或るテオーリア「観」を据えたときに、歴史はそういうふうにはしか見えてこない。そこからそのまま、とうとう 21 世紀の今日まで来てしまったわけです。

文字化されたものから歴史がはじまる、というエンゲルスの根本規定を踏まえながら、なおかつ、ほんとうに考えれば、二千数百年の古典古代ギリシアらしい人類文明でもって、人類文明史を語るのは、思いもつかない矮小化になってしまいますよ、ということをおわたしは言いたいわけです。

今日も、金子務さんが、エヴァンスのことをお話になったことに尽きるのですが、今度の第二次世界大戦の前後のことだと思うのですが、だから、最近も最近のことなのでして、そんなエヴァンスの発見が出ようとは、西ヨーロッパ人も、日本人も、世界中のだれもが、思いもかけなかったのですから。

イギリスのエヴァンスが、クレタ島へ行って、以前から見当はつけていたのですが、クレタ島の、文字をもった古代文明の遺跡を発掘した。

エヴァンスがクレタ島を掘ったら、例のわたしの言う「念力」で出てきた（笑）。これは、クレタ独特の文字だったのです。エヴァンスは、「クレタ学者」ですから、かれは、クレタが地中海文明の中心であって、この古典古代ギリシア文明というのは、このクレタ文明が二次的に波及したものだ、と信じていたのです。

それを信じるとどうということになるか、というと、クレタ文字がギリシア文字であることを、解読できた。アルファベットではない別のギリシア文字が、クレタ文字なんです。

だから、クレタ文字がギリシア文字のアルファベットよりも前の文字ですから、地中海文明の歴史には、アルファベットで記されていない以前のところに、すでに文字があったのだから、私に言わせれば、記録されたものとしての歴史がそこにはすでに在った、という新たな筋書になるわけです。エンゲルスの言う文字＝歴史という観点から見て、歴史はその分だけ遡る筈なのです。

地中海世界には、たくさんの島々があって、そこにはそれぞれ、各々の島の城砦国家があって、そこで使われていたエヴァンスが発掘して整理したクレタ文字の解析を見ると、城砦家産国家ですから、なんといいですか、これは、一国家族「経済経常収支」表というか、羊が何頭、牛が何頭、と出入りが細々と記入されている。一種の家政経済＝オイコノミーですが、それが解読されたのです。この「オイコノミー」から、「エコノミー」と「エコロジー」も出てくる。

その解読によって、2500 年以前の古代ギリシア文明の、そのまた以前の 5500 年間の地中海貢納制・母権制国家の在り方というのが、あぶりだされてきたのです。だから、わたしは、どうしてもこれを書かなければならない、と決心したのです。高校で教わる世界史は、全部が全部インチキとまではわたしは言わないが、根本的にそれは嘘である。それは今や、エヴァンスのクレタ文字の発見が為されて、その国クレタの歴史が明らかになったのだから、人類の起源の歴史は、8000 年遡ると言う新しい見地に立って、その解明に取り掛からなければならない。その念力で見ると、いろいろと見えてくることがあ

る（笑）。

8 甲骨文字解読の歴史的意味

東の方のことも、西の方との対照均衡上、もうすこし言い足します。東の方では、司馬遷の『史記』以降の歴史も、甲骨文字が清末に羅振玉によって発見された以上、書き改めなければならない、とわたしは思っています。東西その軌を一にする。東西軌を一にすることは、全長ですから、東に脊髄があるんで、わたしたちは多くのことを、以前よりも今はよくわかっているわけです。

甲骨文字によるト占による歴史の意味の解読は、殷の時代のことですから、殷の文明の在り方では、文字のト占ということが非常に発達していますから、その殷の時代に「甲骨文」という焼きト占というのを発明したのです。

いま、甲骨文は分かりきったことですがけれども、分かりきるまではだれも分かっていない。北京で薬屋が、甲骨というものを、どこからか持ってきて、これを砕いたものを風邪薬として売っていたんです。北京にいた羅振玉という人は、非常に優れた敏感な歴史考証家で、それがどこで手に入れたかが気になって、そこで、とある村から北京の薬屋に持ち込まれたことを知り、その持ち込んできた百姓たちを辿って、その湖南省の村まで行って殷時代の甲骨を買い集めだした。すると、村人たちが金になるので、それをたくさん羅振玉のところへ売り込みにやってきました。その甲骨に占いの文字が書いてあった。これで「甲骨文」が明らかになったわけで、古代国家というのは、神聖なト占国家ですから、そこにおける政治的行為、経済的行為のパターンというのは、国家・国王の占いによって一切やるのですから、朝から晩まで殷人は酒をくらは、甲骨文字の国家ト占による解読で、日常の大事のすべてを決定していた。

つまり、甲骨文字は殷の国家の文字であって、殷というのは、だいたい「酔っ払い国家」ですから、そこで、羅振玉の甲骨文研究が出てきたんです。これの解読によって、漢字の由来というのが分かってきた。だいたい、1889年の発見以後、殷王朝の实在の司馬遷の『史記』の記述がもっと遡りうるとされたわけです。

日本の京都帝国大学系統の貝塚茂樹博士以下の学者はみな、清朝末の考証学者羅振玉の親友ですから、ここに殷の甲骨文字の研究が隆盛になり、これまで、白川静博士にいたるまで盛んに続けられてきた。司馬遷はもちろんのこと、甲骨文のことを知らなかったわけですが、この大歴史家が『史記』で記していた〈殷周革命〉が実は實在していたということが、完全に実証されるにいたった。この「殷」は「商」ともいう、牧畜・商業・交易文明であり、その歴史的 content が次第に解明されてきたわけです。

羅振玉の甲骨文の発見と解読とで、孔子以来の「周」以前のところが次第に分かってきた。現在もまだ掘っているのです。これからも何がいったい出てくるか、それで歴史がどんどん遡って分かって、変わるんです、東洋史も。改めて、そこから考え直してみる必要がある。だから、東西軌を一にするというのは、羅振玉が、甲骨文字を発見して、甲骨文字を解読した、そうすると、不思議に思うんですが、そういう〈観〉を持っていると、こんどは、石に彫ってある文字などが見えてくるのです。これは恐ろしいもので、やはり〈観〉という念力がないと、見えないのです。「金石文」の発見です。これもわが国の白川静博士が、「甲骨文」と同じで、世界一に強い。

先にも触れたように、清末の考証学者羅振玉の日本での親友が、京都帝国大学時代の貝塚茂樹博士らで、それが京大を中心に学問的に大発展しますから、甲骨文研究、金石文研究でも、日本は世界無比に強いんです。現代日本では、わたしが一番尊敬している白川静博士という独学者は、「金石文」を見つけ解読した。こういう人の文章を読むと、漢字の古来の大本は全部、明らかになる。それが、東洋史の全体の書き換えにつながってくる。そこからのヒントで、アナロジカルに考えれば、エヴァンスの発見したギリシア文字に匹敵する原古文字発見が、東洋史の方でもあった、ということになります。

あと 10 分です (笑)。さきほど、金子務さんも指摘されましたが、わたしは、念力でもってエヴァンスがクレタ文字の発掘から地中海世界史が世界史である、と考えたことに鑑みて、その地中海世界史というものを、ミノア・ミケーナイ地中海文明である、と規定したわけです。これは、場所はちゃんと判っているし、ギリシア文明と地理的に重層しているけれども、歴史的な由来は、「ミノア・ミケーナイ文明」という、古代ギリシア文明の前段の文明であって、それは、金子務さんのおっしゃる「女権制の文明」であり、「貢納制の文明」であって、それは絶対に、奴隷制と家父長制の古典古代ギリシアの文明では無い。これは、非常に大事なところなんです。

そこが重層しているところから、非常に問題が見えづらくなっている。だから、この由来とパターンとを切り離して、相互分離のうえに世界観・世界像を立てなければ、今日の世界をほんとうには把握できない。地中海世界には、いまはミュケーナイ文明、バツハフォーヘンが発見した母権制的で貢納制的な城砦王朝文明というものが、5500 年間にわたって先駆けてあった。そのことを抜きにして、古典古代ギリシア文明 2500 年以後の世界史で、間に合わせるなどというような横着なことは今ではもうできっこない。

9 「トロイ戦争」の歴史的位

もうひとつ大事なことは、さきほど、金子務さんが「トロイ」というのはこの辺だ、この地図の上でと言われましたが、要するに、当時の「トロイ戦争」というものの位置づけが、根本的に大事なんです。

「トロイ戦争」は、シュリーマンというすばらしい感性をもった男が、子供の頃、「トロイ戦争」の話を読んで感動していたのです。あとは、お金が溜ったらトロイ遺跡を掘りに行こうということで、かれは生きていた間に幸いにその時がやって来て、これも念力をもって掘ったから、驚くべきことに七層にもわたって、「トロイ遺跡」が出てきたんです。最後の「トロイ戦争」は、十年間戦われましたが、「トロイ」という地中海世界の生死を決した世界戦争というのは、総体として百年以上戦われたのです。二〇世紀的現代の文明がウェスト・ランド(荒地)化してしまった世界大戦だって僅か二回ですからね。七回もの世界戦争の繰り返しで、完全に完膚なきまでに滅亡してしまった古代トロイ文明が、七回も不死鳥のごとく再建を果たした上で、ついに力尽きてしまって、地中海世界文明のミノア・ミュケーナイ文明は古典ポリス国家都市文明のアテネへと移行した、ということも当然なことであつたわけです。

七回にわたって戦われ、滅ぼされては建て直したところをまたシュリーマンが掘り、滅ぼされては建て、建てては掘り、ということは、当時、「トロイ」は地中海世界の文明の一番の中心ですから、金子務さんがみごとにおっしゃるように、トロイを通じて黒海地方の多くが押さえられているわけですから、そこを通してギリシアの田舎のほうに配分されるというだけの話なんで、トロイを制するものは地中海世界を制するから、その戦争というのは、きわめて大規模で長期に渡って、百年間以上にわたって実に

七回も戦われた古代の「世界戦争」だったんです。

トロイがいかにかに地中海交易の中心として繁栄する自由権を持っていたか、そして、七回滅ぼされて七回蘇がえってきたことが—例えば、ハンニバルの故郷フェニキアの文明というのは、古代ローマ帝国の世界一の軍事力によって完膚なきまで徹底的に滅ぼされて湮滅させられてしまったわけですが、一度滅ぼされたら最後、焦土の上に塩まで撒かれてしまって、文明の中心としてはもはや蘇えり得なかった。だから、文明の復元力というのは、地中海世界の中心でなければありえないことなのです。

それが、百年以上も戦われたトロイ戦争によって、「ミノア・ミュケーナイ地中海文明」はついに、回復不可能に滅ぼされてしまったのです。そのいわれが、ヘロドトスの〈ヒストリアイ〉が驚異の念をもって描出した、古典古代ギリシアのポリス都市国家の出現につながるわけです。

さて、ところで、少年時代の夢が叶って、トロイを発掘して七層ものその遺跡を発掘することができたことで味をしめてしまった、かのシュリーマンは、ここ掘ってワンワンで出てきたから、今度はミケーナイ文明を読んだことがやはり昔あって感動したことがあったので、今度はミュケーナイを掘ればまた何か必ず出てくるぞ、ということで、また掘ったら、これが念力でありまして、今度もまたまた、本当に出てきたのです。だから、絶対に念力ですよ（笑）。

そのように、トロイ戦争を位置づけると、『イリアス』や『オデュッセイ』というホメロスの叙事詩がよくわかってくるのです。ホメロスの叙事詩というのは、ホメロスは、古典古代ギリシア文明の曙の直前のところで、古典古代の「ユリシーズ」を書いた。マア、このわたしの『主体のユリシーズ』三巻本の古代版といったところですが、それをホメロスが書いたというよりは、それでもって地中海世界の村人たちに『イリアス』や『オデュッセイ』を朗唱して、同時代の歴史として語り聞かせたところ、聴衆の村人たちとしては、地中海世界の自分たちの由緒を聞きたいので、夕方になるとみんな集まってきましたから、そこでホメーリダイたちは、『イリアス』と『オデュッセイ』の歌物語をしたわけです。だから、地中海世界の民というのは全部、トロイという世界戦争によって、地中海世界が滅びたということの、世界的ノスタルジアの裡で生きていて、自分たちが、どこからきて、いまどこにいて、これからさらにどこへ行くのか、ということをも、みごとに心得ていて、健全きわまる歴史観をもって生きていたわけです。

そこから逸脱することは、人間が生きるためのポイントを失ってしまうことです。そのことを毎晩、毎晩、ホメーリダイたちの高らかに朗唱する叙事詩を聞きに集まってきた。ホメロスの末期のときに、フェニキア文字からアルファベットが出てきて、ホメロスは、それによって、書き文字によって歴史を綴ることが出来たのです。だから、ヘロドトスが文字にした歴史を書いたという前に、わたしはかねがね疑問をもってきていましたが、ホメロスの時代、つまり、地中海世界の「暗黒時代」といわれておいた時代に、その末期ではあるけれども、かれホメロスはすでにアルファベットを知っておって、その歴史をチャンと口承から文字記録に起こしたのではないかと。そう思うと、ヘロドトスの〈ヒストリアイ〉の歴史時代に、さらに一時代遡って、歴史を論じなければならない。ですから、この〈古代のユリシーズ〉ということにあいなるわけのものです。

だから、中世における西ヨーロッパにおける学問のほとんどは、イスラーム文明がアラブ世界で温存していた古代ギリシア時代の文献に依拠しながら、ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイ』の整理、それとアリストテレス哲学のアラビア語記本の整理に、全部費やしたと言っていい、ともわたしは思い

ますので、これも立派な文字記録された歴史なわけです。

これだけでも、わたしたち人類は、どれだけの恩恵をアラブ世界に蒙っているか、計り知れないものがあると思います。だから、トロイ戦争についてはっきりさせたということは、ホメロスの位置づけをはっきりさせたということでもあって、その時には、すでに歴史の黎明期というのが始まりだしていた、ということです。そのうえに、戦後にエヴァンスのクレタ文字の発見があったんで、これで歴史が5500年前にはねあがったのです。それによって、8000年の世界史の本論というものが、明らかになった、と思うわけです。

10 ローマ帝国の形成と滅亡

これで、あと5分です（笑）。簡単に、5分間で、ローマ世界帝国まで行きます（笑）。先ず、古典古代ギリシアのポリス国家がいつ滅びたか、という問題があります。これも、こんな簡単なことも、明らかにしている歴史書は、残念ながら、これまでどうしても無いのです、そこを見ていただきたい。

これは、普通に言われていることは、まったくインチキで、本当は、前回も申し上げたように、アレクサンドロス大王の大東征によって、「ヘレニズム世界帝国」を作ったということが、古代ギリシア都市国家文明と古代ローマ帝国文明との間に入る。そのことによって、つまり、その世界帝国の原理の反対だから、当然、テーバイとアテネを中心にする最後のポリス都市国家は、アレクサンドロス大王の遠征開始中、原理が全く違うから、大王に対する身の程知らない、小さい「自己幻想」的な叛乱を起こすわけです。例の「ギリシアという幻想」が、自己幻想として為せる業でした。アレクサンドロス大王は偉大な大王ですから、最初に叛乱を起こした例のデモステイス先生のテーバイのことは、見せしめのために完全に殲滅したのです。皆殺しです。これに震え上がって、アテネはじめポリス国家は全部、アレクサンドロスの前に屈服して、自己解体してしまうわけです。

だから、世界史の真相としては、アレクサンドロス大王の東征にやられて、この時はじめて、最後のポリス国家が全部、息を引き取るのです。そんなことさえも確認しない「世界史」なんて、インチキもいいところじゃないですかね（笑）。

その次に、前回も申し上げた通り、アレクサンドロス大王は、その軍を直ちにそのまま率いて、ダレイオス大王の偉大なるペルシア帝国の制圧にかかるのです。三回にわたる大世界戦争があって、それぞれ50万からの大軍勢を擁して、三回ともその大戦闘でアレクサンドロス大王の方が勝つわけです。それで最後、ペルシア帝国の最後の王ダレイオスは、逃げる途中で身内のものに暗殺されて、路上の馬車の中で息を引き取る。こここのところで、ペルシア大帝の運命は、はじめて終わるのです。ペルシア帝国史というのは、今の歴史書に記されているよりも、ずっとあとに下げて考えなければならないわけです。ここで〈歴史は東より〉と言われた、オリエン特時代は決定的に終焉させられるわけです。

つまり、ペルシア大帝は、〈ヘレニズム時代〉に、アレクサンドロス大王の大東征によってはじめて滅ぼされてしまった世界帝国なわけです。だから、そこは、「世界帝国論」としてはきわめて面白いところです。〈ヘレニズム〉という新しい世界原理にもとづく世界帝国が、ペルシア帝国という古い世界原理にもとづく古い世界帝国を滅ぼしたのです。その違いがどこにあるのか？ そのヘレニズム帝国を経ますと、古代ローマ帝国が「市民原理」にのっとなって作られてくる、つまり、ポリス的な古典古代

ギリシア原理によって作られている、「新しい世界帝国」の形成なんだということの再検討が、これで可能になるのです。

それは結局、原理的にはどういうことかと言いますと、原理としてギリシアからローマへの古代ギリシアのころまでゆくでしょう。自分の足元の創立原理である「市民」権利は、「市民派」の異域・異族へと世界的規模へとローマ世界的規模で極限にまで拡大してゆき、一種のマッチ・ポンプをそこではやっているわけですね。そういう時に、マッチ・ポンプやりながら、古典古代ギリシアのポリス原理が、後の古代ローマ世界帝国のローマと違う点は、自分の論理の「市民権」というものを厳格にそういう小土地所有者の古い市民資格に極度・厳格に限定してゆくのか、それとも、どこの異国・異域・異族の征服でもジャンジャン、ローマ市民として拡大しながらやってゆくのか、ということの歴史的選択になるわけです。

ペリクレスのアテネは、そういう小土地所有者イコール市民イコール戦士、ということなのです。だから、あれだけ広大な海上交流と船舶業を実現し、そこで外資を貸してくれる人や両替をしてくれる人にも、一切市民権を与えないで、「エトランジェ」として取り扱い、外人扱い、客扱いにしていたのです。これが、アテネ的なポリス都市国家に特有な限界をとっぴらって乗り越えた古代ローマ帝国は、それまでは首都ローマにだけ限定された「市民権」を、ローマ帝国が世界帝国として世界的大規模に広がってゆくにつれて、世界帝国の版図内のあらゆる人々に、市民権を惜しげもなくジャンジャン付与して、ブリテン島からゲルマーニアへと世界帝国化してゆくのです。

これが、世界ローマ帝国の巨大な発明です。ローマは政治と行政を発明した、とよく言われますが、その中味を直ちに問わなければならない。その中味の核心は、ローマの世界帝国が、古典古代ギリシア・ポリス国家のなかでは市民権の制限と限定と自衛をやっていたのを、権益の世界的拡大と共に完全に取っ払ってしまって、それを世界大に拡大したところにこそあるわけです。

世界ローマ帝国の滅びた原因とは、あれだけの龐大な古代ローマ帝国の在り方の秘密を、いまの塩野七生女史はまったくよくわかっていないところなのですけれども、いま言ったことでどこに原因が出てくるか、すぐに分かる。拡大した「市民権」のブリタニアとゲルマーニアという根源的にローマとは異民族であって、本質的にローマ市民たりえない「バルバロイ」とがぶつかって、古代ローマ帝国に大動揺が生じ、ローマ市民そのものを自滅させてしまったわけのものです。

これで、古代ローマ世界帝国は滅びたのです。わたしが思うに、そのことを一番よく書いているのは、ヘロドトスとツキジデスの〈歴史＝ヒストリアイ〉を意識的に継承しようとした、タキトゥスの〈同時代史〉なのです。タキトゥスの着眼点は—かれは、ゲルマーニアの出身者でありますから、「市民権」を世界化してしまった大元のローマ市と、バルバロイのゲルマーニアとの激突が始まると、かれ自身は、ローマの元老院の急進的な共和派の議員ですから、差しあたり政治上の憚かりが在って明言はしなかったけれども、タキトゥスのその二つの偉大な史書には、どちらもバルバロイによるローマ市への侵入が近いだろう、という強烈な予感のもとで、ペンそのものを止めざるを得なくなって、そこで、かれ畢生の史書は文字通り二度ともぶつんと中絶されておりますけれども、それで滅びるといふ話が、その後に完証されていったのです。

その滅び方は、どういうことかという、ネロが滅びたという形で現われたのです。これは、タキトゥスの歴史家としての並々ならない力量です。ネロのああいう苦悶というものを、個人的な変わった人

だ、とエピソード化する塩野七生女史は、私小説的・通俗小説的で面白くはありますものの、その、基本的には、歴史のそういう道理のなかで、かれネロの狂乱の原因もはじめてきちんと理解できる、という風にこれを切り離さなければならぬわけです。

ローマの元老院議員であったタキトゥスが、「パンとサーカス」に明け暮れているローマ市民の裡に在って、〈バルバロイ〉とされているゲルマーニアのほうに、世界史の未来への胎動がある、と見てとった。非常に文明的頹廢の極致に達していた「狂帝」詩人のネロの問題です。

だからこそ、かれネロはローマの大火に際会して、その高尚な(!)文人趣味そのものを発揮して、夜をあげて古代都市の滅亡の詩を吟誦して喜ぶネロが、「暴君」である所以なのです。それもけっして、塩野女史が出しているようなメロドラマでは決してないわけです。そういうものが、そこで、滅びるべくして滅び去った。これは、古代ローマ帝国が滅び去った歴史的必然性の問題です。こうして、わたしのこの本の第三巻を、書き収めているわけです。

11 世界帝国の世界史的推移

だから、その通り理解することによって、古くから「東と西」という大問題があり、近くは今言ったような「世界帝国の世界史的推移」の問題がある、ということ念頭に置くならば、現在の、例えば小泉純一郎首相が、なぜサアワに自衛隊を派遣して、集団的自衛権で来年憲法九条との矛盾を乗り切ってゆこうとするようなこと、まもなく自衛隊は撤退しなくてはなくなるだろうというようなこと、ブッシュも最後にはイラクから撤退せざるを得ないというようなこと、そうなれば、「二一世紀型戦争」と言われた「アフガン・イラク戦争」の完全敗北による土崩瓦解と総撤退がやってくる、そうしたもろもろの事柄の由来というものが、世界史的に本当に明らかにされてゆく。これで、わたしたちの眼前で、来年か再来年に、アメリカ侵略・征服軍敗退以後の直接選択として、〈パックス・アメリカナ秩序の大没落〉の世界史的大家業が顕在化し、それと同時に「変動相場制」という、覇権通貨ドルを基軸とした国際通貨体制が必ず解体してしまうこととなりますから、それから先、世界守護神はどこへ行くのか。これは全くもって次回のお楽しみ(笑)です。そこで、また三巻分くらい(笑)また、短く(笑)書かなければならない、と思っていますので、その時にはまた、わたしが息があつたら、みなさんにもう一度是非お会いしたいものだ、と思います(笑)。では、これにておしまい、みなさん、さようなら。

全体討論

猪野 連続懇談(全4回)の最後の討論になりました。時間も差し迫っておりますので、数名の方々にまとめてご質問・ご所感・ご提言をいただき、そのそれぞれについて、なださん、金子さん、いいたさんにお答えいただくということにしたいと思います。では、どうぞ。

来栖宗孝 来栖(くるす)と申します。実は、いいたさんの本を3冊読むのに大変でございまして、全部で4回の研究会がございましたけれど、読まずに出てきて読まずに質問するというのは大変に失礼な

話でございます。今日は最後でありますし、今回は目を通して来たということで発言をさせていただきます。ふたつのことを申し上げます。ひとつは簡単なことです。最後にいいださんがローマ帝国の興亡、つまり興隆してきたということより、むしろ、没落し滅亡してきた歴史的なものはなにか、というのが、一番大きなテーマであったと思います。ここで質問と反対意見です。その都市国家ローマが市民権を安売りして滅んだ。その象徴として暴君ネロの自殺ということではありますが、どうも歴史的には合いません。例えば、典拠を明らかにするために、具体的にきちんと頁数を申し上げます。第3巻の2225頁、2251頁、2253頁、2266頁。それ以上にわたって、ローマ帝国の最盛期は、ギボンもいいださんもお書きになっていますが、例の5人の賢帝です。ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニウス・ピウス、マルクス・アウレリウス。この5人がローマの全盛期であったといわれます。ところがネロはその前に死んでいるんです。だからネロが死んだあとのローマ帝国は本来の市民国家を誇示していたかは別としても、少なくとも5賢帝の時代までは、領土の広さという点では、5賢帝時代が最高の発展段階であったということで、ネロによって、ローマ帝国の滅亡が指示されたということは無理ではないか。「ローマ帝国全巻の終わりである」というのは早すぎるではないか(2322頁)。これがひとつでございます。これは議論をしたいと思います。

それから、もうひとつ、なだ先生、金子先生、いいだ先生のお三方が、なんとまあ、ミケーナイ文明のギリシア文字の解読からはじまり8000年の歴史を2時間半くらいで論じ来たり論じ去っては、これはとても問題であるので、意見もだしようもないという感想を受けたのですが、ひとつだけ、申し上げます。結論から言いますと、わたくしは東洋の一人の日本人として、たえずやるせないという感じを抱いております。と、申しますのは、確かに3人の先生がおっしゃったように、歴史をよく調べれば調べるほど、西洋中心史観を訂正しなければならないのは明らかです。明らかではありますけれども、それなら、なんでいままで、すくなくとも、われわれが知っている二千数百年の歴史で、常に、文化・文明発祥の地とされているアジア、エジプト、バビロン、インド、中国、というような東の文化文明が滅んで、そして古典古代ギリシア・ローマ、さらには、キリスト教圏になりますが、西ヨーロッパ、これが世界史を支配してしまったのは、これはどうしてですか、ということです。ですから、昔はそうではなかったんだと。特にローマではガリア(今のフランス)、ゲルマニア(今のドイツ)、ブリタニア(いまのイギリス)は、昔はほんとうは野蛮国であります。その野蛮国が2000年の後に世界を逆に制覇して、文明の端緒を開いた東洋がかくも無残にやられっぱなしになってきた、というやるせなさを、わたくしはずっと抱いています。これは、ヘーゲルが特に強調するのですが、これは、あそこに(黒板を指す)地図が掲げられてありますが、ギリシアの半島からエーゲ海の東にむかってぶつかると、小アジア、今のトルコです。ギリシアでは、アーシア、アジアといっている大陸が始まる、アーシアというのは、結局、神秘である。なぜか。要するに、エーゲ海の岸から東の中国大陸から日本にいたるまで、東洋においては本来、自由、平等、特に人格、人権などの観念がなかった。観念がなかったから、言葉がなかった。これはヘーゲルやマルクスらの偉大な人々が東洋人を侮辱する言葉なのですが、事実、そうなのであります。事実、そうであるとすると、どうも、いいださんの大著作を拝見して教えられるところがたくさんありますけれども、同時にわたくしども、明治以降も、我が家は、世が世ならば、七代にわたって徳川家の御家人であった。明治以降、没落してしがたいサラリーマンになった。どうも、何かあるたびに、世が世ならば、わが家は、桓武天皇いらい14世の末で平清盛であるとか、清和天皇何世来の源義家の子孫であるとか聞かされて、昔はアジアが進んでいた、豊かだったと自慢して、まことにごもつともだけれども、といて、わたしどもが習ったのは実はドイツの学問だったのです。その意味で、歴史を書き換えなくてはならないことはわかるけれども、それから先はどうなるのだろうか。なだ先生の

言葉を引用して終わります。つまり、マルクス中毒、これはだめなのです。しからば、マルクスの思考方法を日本の歴史、日本の現状を分析して、そして、われわれはどうすべきか、という、このことについては、実はどなたもよく書いてくださらない。ことマルクスについては、わたくしもそうでありませうけれども、マルクスの方法をもって、日本の現実を分析し運動を起こして成功した例はあまりないんです。別に絶望しているわけではありませんけれども、こういうことです。知性のペシミズムと意思のオプテミズム。これはアントニオ・グラムシの言葉です。「魅せられた魂」を書いたロマン・ローランの言葉です。それにしても、「知性のペシミズムと意思のオプテミズム」、これまた、ロマン・ローランでもアントニオ・グラムシでもいいですが、外国人の引用なんです。自分で自分を怒っていて、やるせないと思っています。世が世なら桓武天皇 16 世の平清盛なるぞと言われても、それはそうなのだけれども、今はどうなんだろうという学生時代から思っております。以上です。

いいだ 本日の二つのご質問ですが、ご質問というより、ご意見ですけれども、来栖宗孝先生が先程おっしゃっているように、ギボンが、『ローマ帝国衰亡史』で、人類史の再構築と規定しておいて、当然、「永遠の都」ローマが思いがけず過ぎ去ってしまったあとの、ローマ皇帝の辿った歴史的運命との関連であるわけですし、それと「暴君ネロ」との関係の問題は、時間的な前後関係だけの話です。

二番目のご意見ですが、これはすこし、金子務さんや、なだいなださんを含めて、もっと議論したほうがよい、と思いますけれど、つまり、東は東、西は西にあって、或る意味では、ヘロドトスの『ヒストリアイ』いらい、オリエントのペルシア大帝国が思わざる敗北を、眇々たるアテネ都市とポリス国家の死闘によって喫してしまっていて、地中海世界のヘゲモニーをポリス民主主義のギリシア国家が握り占めて古代世界史が大転換してしまったということから、念力を働かして行って、世界史を整理して、今日の西洋中心主義的な世界像の原点が出来てきたわけですし、それを覆すための力点としては、光は東から西へ行ったように歴史は書き添えられていくけれども、もしかしたら、また西から東に行くような時代にこれから成るかもしれない、とわたしとしては、大雑把に申し上げたいわけです。

いま、休憩のときに、なだいなださんと楽しいおしゃべりをしておりまして、その時の話を別にみなさんに押しつけるつもりはさらさらないので、そういう歴史の念力から新しい二〇世紀的現代の方から見ると、ローマ世界帝国の交流史というのは、古典古代ギリシア文明のポリス都市国家のもっていた小土地所有者の市民権の権利の専有を、ローマ世界帝国の拡大が征服した異国・異族のすべてに、ブリタニアからゲルマーニアも含めて「ローマ市民権」をどしどし拡大付与して「世界帝国化」していったところに、その原動力がある、とわたしとしては考えています。

それはそれとして、とにかく「永遠の都」と観念されていたローマ世界帝国も滅びましたよ、と。だが、それをモデリングされた念力の産物である現在の西洋中心主義史観というのは、ブッシュ大統領のイラク侵攻の今日の大失敗の事例にも端的に見られるように、近く、その終わりが来ますよ、ということにあいなる。それに対比してみますと、前近代の中国の王朝文明というのは、現在、もちろん、辛亥革命を経て、さらに毛沢東革命を経ておりますから、形態は王朝国家ではありませんけれども、殷とか秦の始皇帝とか隋の煬帝いらいのモデル遺産を、中央アジアにいたるまで継承した漢の武帝の建造した中国王朝文明というのは、明治維新以来の近代天皇制日本の日清戦争以来、日本の「脱亜入欧」の大久保利通政権が中国の李鴻章の「開化派」政権を打ち破って以来の、近・現代日本人の優位化以後「チャンコロ」主義的な「侮辱・差別」に変わり、そういうすこぶる歪曲された形となった次第です。しかし、

中国王朝史は、一見きわめて停滞的にただ回転しているだけのように見えて、実はけっして一刻も淀み滞ることなく、実にダイナミックに歴史過程化して、未来に向けて展開していったと言えるだろうと思います。現在で言えば、滞っているのはむしろ、種々の社会的諸矛盾をすっかり治めてしまっているこの企業大国日本の方ではないですか？

わたしは、中国王朝文明よりももっと古いのは、実に三千年間にわたった古王国→中王国→新王国と辿られたエジプト王朝文明だ、と思っています。地中海文明のヘゲモニー闘争をめぐる、ペルシア文明がエジプト文明を亡ぼして併合し去ったことを、古代地中海世界の画期として、わたしは見定めているわけです。

古代エジプト文明については、実は、「ヒエログラム」と呼ばれる文字の解読が、もっと進捗して、遡ってもっと広く確定することが出来るならば、中国の甲骨文字よりももっと遡ったところにまで、人類史が発生した以前のところまで突き抜けるだろう、とわたしは秘かに思っています。もちろん、エジプト王朝国家がそのまま今にあるわけではありませんけれども、いわゆるナセル独立革命以来、今もって非常に脈々として生きているわけです。こうして、すべてが「現代史」として、同時代史の有機的一環へと大包摂されてゆくわけです。

それから、チグリス・ユーフラテス両河流域のメソポタミア文明ですが、これは要するに、イラン文明ですけれど、今日イランが核武装してアメリカに対峙しようとしている現状を見るならば、イランもまた衰亡するどころか、新しい復興のパワーを「ホメイニ革命」以来排出しつつあるのであって、最近、世界一のドル・核帝国としてのアメリカとの激突過程に入ってきているわけのものなのでしょう。

それからもう一つ、七世紀いらいのイスラーム文明があります。今日の世界の諸文明のなかで、現代資本主義システムの後に、一番生き残りそうなのは、イスラーム文明であり、また、コンスタンチノープルの「東ローマ帝国」のビザンティン文明を受け継いでいるギリシア正教、ロシア正教的な宗教文明のほうもまた、生き残る確率がある、とわたしは判定しています。

そう区分けすることができるのではないかとわたしは強く思っています。とりわけ、イスラーム復興運動のパワーが、ドル・核帝国の金融的・軍事的中枢を直撃した〈9.11 事件〉以来、その現代世界史的兆候がはっきり現出しているでしょう。やはり大まかにいえば、西によって捻じ曲げられた人類史が歩まされてきた今日の世界舞台において、東の文明の舞い戻りと東西文明の抗争を含めた再融合過程の進展をベースとして、わたしもこの超マクラ本の全三巻を書いたわけです。

9.11 事件以来のイスラーム復興文明のパワーに、今もキャッチ・アップしつつあるのは、ラテン・アメリカのチャベス革命以来のマルクス主義再生のパワーです。このイスラーム復興とマルクス主義再生との今日の出会いが、現代世界における東西文明の再会の最先端的領導力である、とわたしは考えています。

そこでひとつ、来栖宗孝さんがおっしゃったことに非常に啓発される点があるのは、にもかかわらず、わたし本来の問題意識に立ち返るのですけれども、近代の資本制で特性づけられる現代世界文明が、わたしたち、つまり、今日のグローバルな世界の人類に遺してくれたものとして、「基本的人権」「民主主義」という概念、あるいはまた「人類」「人間」「人間性」といった一連の価値概念があるだろう、と思います。これは概念、観ですから、念力なんです。やはり、「基本的人権」「民主主義」「人間性」というのは、二一世紀を通じて当然、将来の文明が受け継ぐべきだ、とわたしは思っております。このこと

は、西洋中心主義史観の根底的克服と十二分に両立しうるし、その歴史的進展が、人間社会の「基本的人権」「民主主義」「人間性」を本来的に具現化してゆくのです。そこで来栖宗孝さんが出された問題を、もうすこしわたしなりに反芻しておく、という東側の復権という問題にもかかわらず、東側が必ずしもなじまない「個人の基本的人権」というものの、継承的発展というものとの結合関係を、わたしたちは、二一世紀に向けての構想力として求められていることは、間違いない、ということになります。それをどういう形にしていくか、ということは、わたしたちの二一世紀がどう生きていくか、という生き方の構想力のポイントだろう、とわたしは思います。

瀬川嘉之 瀬川と申します。今の続きのようなことでお聞きします。古典ギリシアには奴隷制と家父長制があるというのが前提だと思いますが、それでは東ではどうだったのか、今の「基本的人権」という概念や言葉は、いいださんがおっしゃったように無い。しかし、それでは奴隷制や家父長制であったのかという点については、どうなのでしょうか

なだ 奴隷制はずっと、東洋にもありましたね。わたしは、いつもわたしの家系をさかのぼって考えるけれども、わたしのおばあさんたちは無学文盲で、そして、自由がなかった。ドレイと呼ばれないけれどもヨーロッパの農奴に近かった。こどもの12か13歳くらいで親の命令で結婚して、10人のこども産んで若死にをして死んでいった。そういう生活をする農民でした。しかし、そのつぎ、3世代の間に、わたしの父親・母親の世代はその土地から離れることが出来たのです。新潟から出て東京に来た。こうして、なんていうか、生きる場所を、自分で主体的に選択することが出来るようになったのです。

そして、わたしの時代になると、わたしの家内はフランス人なのですが、わたしは外国に行くとき、「青い目の嫁さんは絶対につれてくるな」といわれたのですが、かみさんをフランスからつれてくることになって、親の意見を排して自分の意見を通すことができたわけです。こういう冗談でうまく切り抜けたのです。「わたしの家内の目をよく見てください。青い目ではないから、みどり色だから」と(笑)。それで相手は話の腰を折られて納得しましたけれど、しかし、そういう変化があるんです。わたしは歴史問題を考えるときに、すばらしい壮大な歴史、8000年前からさがってくる歴史という見方もあってよろしい。そういう歴史は聞いていて、勉強になって非常に楽しい。しかし、問題はなぜ日本に小泉のような人間が出てくるかです。それはなぜか。はっきりしていることは、現代史に対する知識の欠如です。ついこの前の戦争のことも、わたしたちが覚えているようなことを、いっさい、覚えていない。そして発言をする。例えば、戦没者という言葉は、わたしたち個人の感覚としたら、戦争の被害にあって死んだという、そういう人間のことで。ところが小泉の戦没者というのは、国のために命をささげた人ということになってしまう。220万の靖国の御霊と称するものは、どこで死んだか。みんな外国で死んでいるんです。しかも、外地で死んだ人間以外を、つまり、内地で死んだ兵隊を、靖国に合祀させるな、と東條なんかははっきりいっていたわけです。そういうことをかれが知っていて靖国にまいったかどうか。つまりそういう現代からさかのぼる歴史観として、もつ必要があると思うのです。

これは世界のどこの歴史でもいい。現代からさかのぼって歴史を見る。実践的に、今の小学校・中学校からそういうかたちで教えられていくことが、とても重要なことだと思います。これはなにも現代の歴史教科書がどうのこうのというような問題は横においても、先生がどんな歴史教科書を使おうと、現

代から教える気持ちになれば、いまからできることなのです。それから先はさかのぼって昔を知ろうとする情熱を教えることによって、今日の話のような壮大な物語も面白く聞ける日もくるのではないと思うのです。わたしは、今のイスラエルの問題、小泉の問題、イラクの問題などが頭の中を渦巻いていて、これを何とかしないで現代人といえるのか、というイライラした気持ちがあるので、その点を強調しておきたいと思います。昔からの歴史観と対抗するには、現代からさかのぼっていく。現代の50年でいい。戦争が終わってから50年、さらに、日本が戦争を起こすまでの50年、それから日本が国を開いて世界に目を向けてからの50年とさかのぼっていけばいいのではないかと思います。

金子 これね、郭沫若（かくまつじゃく）が、殷の時代の甲骨文字で「臣民」という文字について、奴隷の文字だといっている。「臣」という文字のコの字は目を表わしている。これは屈服したあとで、目をつぶされてつきさして奴隷にされているのです。「民」は、立って抵抗している人を表わす。でも、やはり目を突き刺されて奴隷にされる。ですから、臣民という言葉には血と汗と嘆息がにじんでいるのです。

それから、なぜ、東洋の巨大帝国が滅びて西欧にやられたのかという話ですが、これはもう簡単です。要するに、西欧では17世紀の科学革命があって、18・19世紀の産業革命とつづき、一番最初に走る走者は、それだけの利益を得るのです。だから、遅れてきたレイト・カマーは、日本でもそうあったし、日本のすこし前を走っていたドイツもそうでしたが、帝国主義戦争では割を食った。科学革命、産業革命そして帝国主義で先陣を切ったのは西洋文明ですが、古代中国、古代インドなどに科学がなかったのかといえば、科学はあったのです。だって、ルネサンスのころ、フランシス・ベーコンが、ルネサンスの3大革命だと威張ったのは、火薬であり、印刷であり、磁石でした。これは実は三つとも古代中国で漢の時代に発明されているわけです。

また、18世紀後半のギボンによってローマ帝国がなぜ滅びたかの議論がありますが、しかし、ギボンよりも50年ほど前に、モンテスキューという人がいて、これも「ローマ人の盛衰原因論」を書いています。あのほうがもっとコンパクトにしかも要領よく書いています。あの時代、モンテスキューは、「ペルシア人の手紙」という書簡文学を書いています。あの時代、つまり17世紀末から18世紀前半にかけて、アジアのほうがはるかに文明が上なんです。文明的な国家というのは、オスマン帝国を模範とするトルコとペルシアなのです。それで、西洋のほうが野蛮なのです。だから、ペルシア人たちに見習え、というようなことが「ペルシア人の手紙」の趣旨なんです。かれらから学ぼうということなのです。

ですから、産業革命によって初めて東西の地位が逆転したのです。だけど、文明というものが科学技術だけで律されるはずはありませんから、もっとトータルに見ていけば、どっちが勝った、どっちが負けた、とは簡単には言えないと思います。

いいだ 瀬川さんからいま非常に大事な問題を出されましたので、わたしもあと1分だけ（笑）、このことについて、わたしなりにお答えします。わたしとして先ほど言い足りないところがあったので、きっと瀬川さんに、うまく全体のことが伝わっていなかった点が残ったのではないかと、思います。瀬川さんがおっしゃった、古典古代ギリシア文明以来の西側の文明は、奴隷制であり、父権制であるということは、歴史上の事実なんで、わたしはあいかわらずそう思っているのです。

それで、瀬川さんのおっしゃりたいことの中には、東のほうはどうだったのか、ということですが、東のほうは、今日は詳しくは述べられませんが、経済的社会構成体としては、当然、「貢納制」でありまして、地中海世界の古い形は、女神が軸になっているので、言葉の真の意味で、バッハフォーヘンが首唱したような「母権制的・地方分権的な社会」の型だったので、そこでなんらかの世界史的な復権ということが今日も求められている。その場合には、古代ギリシア文明以来の「西ヨーロッパ文明」というのは、普遍的規範にはならない、ということ自体は、疑いないということだろうと思います。

わたしは、そういう問題の裡には、じゃあ、古オリエントの「貢納制」はどうなったのか、ということが、世界史のかんどころなのでありまして、やはり、これまで学校や出版物で教え込まれてきていることとほぼ正反対なことなのですけれど、奴隷制、農奴制、封建制とかの文明の在り方というのは、人類史の大道ではない、というのがわたしの意見なのです。これは、東洋の問題とはまた自ら質のちがう問題系列に属していて、東洋では、基本的には貢納制の国家であって、西洋的な意味では、異質なものであろう、と思います。だから、そのこのところの違いを、初歩的にでも突き留めなければならない。

現在、世界的に普遍的になっている「グローバリズム」の世界的進出というのは、まさに西側の奴隷制的で農奴制的なそういう古い階級文明の実情をいまだに色濃くもっていることは、はっきりさせることが必要だろうと、そうわたしは強く感じます。

猪野 いいださん、なださん、金子さん、どうもありがとうございました。非常に中味の濃い発言・講演であったと思います。あらためて感謝を申し上げます。すくなくとも、私にとりましては、この全三巻の読み込みと勉強には、この連続講演だけでは終わることはできません。リアルに現前する現代史と格闘しつつ、今後も歴史研究に当たらなければならないと再認識しました。これで毎月1回、全4回の連続懇談を終了しますが、この間、主役のいいださんには、わたくしの勝手に無謀な要請に完璧に応えいただきました。あらためて感謝と御礼を申し上げます。いずれこの連続懇談の記録は何らかの形で刊行する予定です。また、最後になり恐縮ですが、この連続懇談に参加されたすべての方々に御礼を申し上げます。(終)